糸島市立

# 伊都国歴史博物館

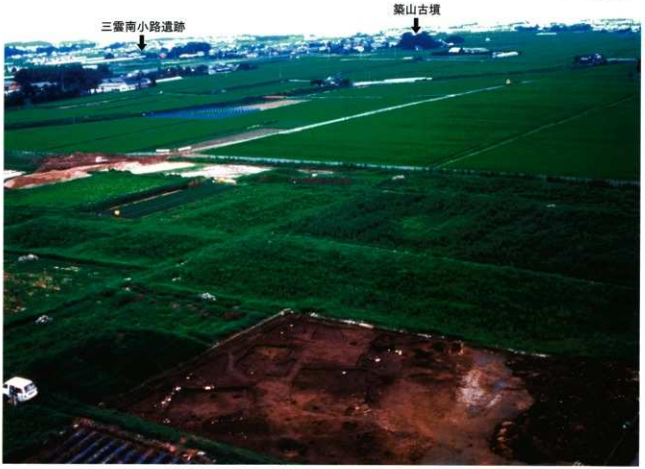
# 紀　要

第11号

井原塚廻遺跡の再検討
―弥生中期後半～後期の墳墓群の新資料から―
……岡部裕俊（1）

雷山神籠石「南水門部」の踏査結果及び
雷山神籠石に関係する交通路について……瓜生秀文（24）

2016




a. 井原塚廻遺跡全景（南東から三霞・井原遺跡方面をのぞむ）

b. 井原塚廻遺跡全景（真上から　写真上が北）

巻頭図版2

a. 1号甕棺墓周辺の土壙状の掘方
（上が北）

b. 1号甕棺墓（西から）

c. 1号祭祀土壙（南から）

d. 3号甕棺墓（左）と2号祭祀土壙（右　西から）

e. 3号祭祀土壙（西から）

左に隣接する土壙は10号住居跡の床面を掘り下げたもの

f. 1号木棺墓（西から）

a. 1号甕棺墓下棺全景

b. 1号甕棺内外の顔料塗付状況

c. 1号甕棺内面の赤色顔料塗付状況

d. 1号甕棺外面突帯の赤色顔料塗付状況

e. 井原坪遺跡1号甕棺底面の赤色顔料塗付状況

f. 1号甕棺上棺　顔料塗付状況

巻頭図版4

a. 3号甕棺蓋（中央高坏）と
祭祀土壙出土丹塗磨研土器A群

b. 丹塗磨研土器　袋状口縁壺1,2（A群）
※手前の口縁部片は11（B群）

c. 丹塗磨研土器　袋状口縁壺片（B群）

d. L字形石杵

e. L字形石杵擦過面

# 序

過日、久しぶりに糸島市の歴史的重要性を大きくアピールするニュースが報じられ、話題となりました。伊都国の王都、三雲・井原遺跡から弥生時代後期にさかのぼる国内最古の硯が発見されたのです。わが国で弥生時代の硯が発見されたのは、島根県松江市の田和山遺跡についで全国２例目とのこと。貴重な発見として、マスコミから大きく取り上げられることになりました。

報道後、市民のみなさまから「早く硯を見たい。」との声が多く寄せられ、急遽、当博物館で公開させていただくこととなりました。

実際に硯を目の当たりにしたお客さまは、長さ６㎝、幅４㎝、厚さ６㎜ほどの小さな板石が、重々しくケースに展示してある様子に驚かれることしきり。ケース内の硯を食い入るように見つめ、「へえ、これが硯か。」と感心される姿や、「どうして、この石が硯と分かったの？」と学芸員をつかまえて矢継ぎ早に質問を投げかけられる場面にも遭遇し、市民のみなさまの関心の高さを肌で感じることができました。

ただ漫然と眺めていれば、平凡な小石にしか見えません。しかし、調査の担当者は、掘り出された膨大な遺物の一つ一つを詳細に観察してその違いに気づき、情報の少ない中国の硯に関する情報を集め、さらに、硯に詳しい専門の先生方に確認していただいて、やっと漢代の石製硯の一部であるとの確信にいたったそうです。調査員の観察力と粘り強さに感心いたしました。

しかし、三雲・井原遺跡は「魏志倭人伝」に記された「伊都国」の中心地。「郡使往来常駐所」であった当地ならではの発見ともいえましょう。今後も継続される発掘調査や研究によって、長い間地中に埋もれていた当市の歴史の謎が解き明かされ、その重要性がさらに高まっていくことを期待してやみません。

さて、私事ではありますが、本日をもって博物館長を退任することとなりました。在任中の７年間、多くの市民のみなさまとのふれあいを通して自らを高めることができたことに深く感謝いたしますとともに、任期の終盤に、この歴史的な大発見に館長として立ち会えたことが大きな喜びであったことを申し添え、最後のご挨拶とさせていただきます。

平成28年3月31日

糸島市立伊都国歴史博物館
館長　榊　原　英　夫

# 井原塚廻遺跡の再検討

## —弥生時代中期後半～後期の墳墓群の新資料から—

岡部　裕俊（伊都国歴史博物館）

## Ⅰ．はじめに

井原塚廻遺跡は、弥生～古墳時代の集落遺跡である。昭和63（1988）年に井原地区県営圃場整備に伴う発掘調査が行われ、平成４（1992）年に調査報告書（以下『報告書』（註1））が刊行された。

筆者はこの成果のうち弥生時代中期後半の甕棺墓に着目し、周囲に周溝をめぐらせた方形の区画墓であることを指摘した（註2）。

平成23年度には、井原塚廻遺跡の関連資料が博物館に移管されたことを受け、収蔵目録作成のために資料の再整理を行ったところ、弥生時代の墳墓や祭祀土壙出土遺物に報告漏れの資料が存在することが判明した。

また、甕棺は博物館の開館当初は常設展示していたが、平成17（2005）年の福岡西方沖地震で倒壊したため、再度の展示をめざして復原作業にとりかかったところ、その途中で棺の内面に赤色顔料の塗布が確認された。

これらの成果は、弥生時代中期後半における伊都国成立前後の当該地方の慣制を考える上で有益な事例になると思われたので、改めて報告することとした。

なお、甕棺に塗布された赤色顔料については、志賀智史氏（九州国立博物館）に同定をお願いし、実体顕微鏡観察、生物顕微鏡観察、蛍光X線分析等のお手を煩わせるとともに、貴重なご助言をいただいた。記して感謝いたします。

## Ⅱ．遺跡の立地と歴史的環境

井原塚廻遺跡は川原川とその支流の赤崎川に挟まれた縦に長い三角形状を呈する段丘上に立地する（第１図①）。伊都国の拠点集落と考える三雲・井原遺跡の南東１kmに位置し、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて、王都の周辺に形成された衛星集落の一つと考えられる。

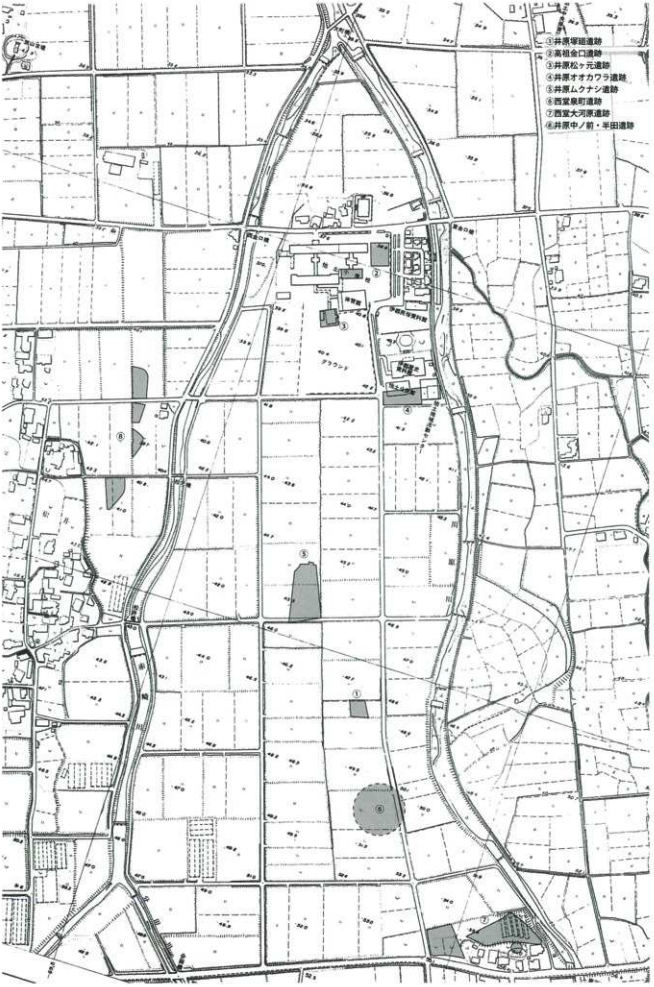
段丘上では、これまでに縄文時代～古墳時代の集落関連遺構が発見され、発掘調査も行われている。怡土小学校内に立地する高祖金口遺跡（第１図②）では、段丘の斜面に堆積した洪水に伴う堆積砂層中から縄文後期～弥生早期の土器や石器等がまとまって出土した。ごく近隣に当該期の集落が展開したものと推定される。（註3）

弥生時代の遺構としては、井原ムクナシ遺跡（第１図⑤）で中期の大溝が検出されたことが報告されている。残念ながら遺構の掘り下げは行われていないが、近隣の西堂大河原遺跡（第１図⑦）では弥生中期の甕棺墓、弥生中期の土器や石器が出土しており（註4）、これらから総合的に判断すれば、この一帯に弥生時代中期の集落が展開した可能性が高い。

なお、前原町文化財地図（註5）には井原塚廻遺跡の南に近接する西堂（泉町遺跡・第１図⑥）で弥生後期の細形銅剣が出土したと記録されているが、詳細は不明である。

一方、川原川東岸の末永地区の段丘上でも、弥生時代中期後半～後期の集落の存在が確認されており、小型仿製鏡も出土している（註6）が、本格的な調査は行われていないため、遺跡の詳細については今後の調査に委ねられる。

古墳時代では、井原ムクナシ遺跡で前期中葉の竪穴住居群が、井原塚廻遺跡で前期後半～中期の竪穴住居群が確認された。同じく前期の竪穴住居群は、赤崎川を挟んで西岸の井原中ノ前・半田遺跡（第１図⑧）でも発見されており（未報告）、赤崎川を挟んで段丘斜面一帯に古墳時代前期～中期の集落が展開していたことがわかる。さらに上流の西堂大河原遺跡（註6）や西堂四反田遺跡（註7）では古墳時代後期の竪穴住居が調査されていることから、古墳時代になると当該地域の集落は、三雲・井原遺跡から標高の高い南側の井原・西堂地区に徐々に移動した様子がうかがえる。また、この地区の古墳時代前期の竪穴住居からは多数の三韓式土器が出土しており（註8）、集落の性格、さらに当該期の糸島地方における朝鮮半島との交流の実態を知る上でも注意が必要である。




第１図　井原塚廻遺跡の位置と周辺の主な遺跡（平成元(1989)年調査図 1/5,000）

## Ⅲ．調査の内容

### 1．墳墓

『報告書』では、弥生時代墳墓として中期の成人甕棺墓１基、その近隣に営まれた弥生中期末～後期前葉の小児甕棺墓３基、土壙墓２基が報告されている。しかし、遺構配置図をみるとこの墓群の南北延長上に土壙が列をなして検出されており、また、２号住居跡の南壁周辺、４号甕棺墓の北側などでも長方形プランの掘り方をもつ土壙が群をなして検出されている（第２図）。

『報告書』では、これらの遺構はいずれも掘り方が浅いことを理由に、墳墓ではないと考えられたが、近年、井原ヤリミゾ遺跡で土壙墓や木棺墓、石棺墓などの成人墓と小児用甕棺墓が群をなして墓群を構成する事例が多く確認されていることから、これらも土壙墓であった可能性を想定すべきと考える（註9）。

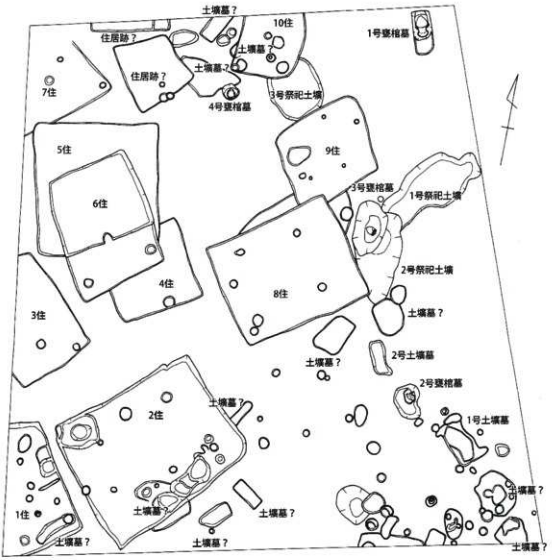
#### （1）甕棺墓

**１号甕棺墓（巻頭図版２-ａ,b、第３図）**

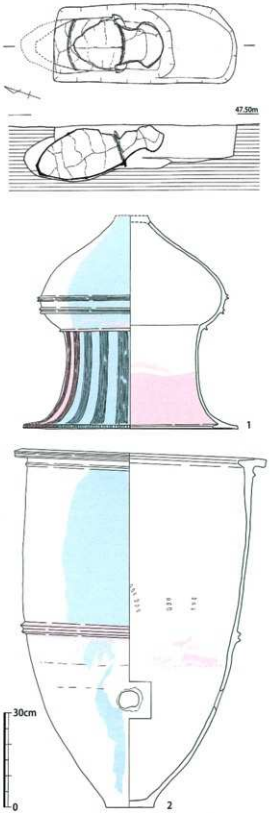
**遺構**

１号甕棺墓は、調査地点で唯一の成人甕棺墓で、上棺に大型広口壺を用いた接口式の成人用甕棺である。

墓壙の平面プランは細長い隅丸長方形で、甕棺は水平面から19度の勾配をつけて埋置され、下棺の下半部は奥行40cmの横壙を掘ってそれに差し込むように納めていた。甕棺の上面が削平に




第２図　井原塚廻遺跡の遺構配置図（1/200）




**第３図　１号甕棺墓実測図（1/50）及び甕棺実測図（1/12）『井原塚廻遺跡』第４図に加筆して転載**
**※赤色は丹塗り部、青色は黒塗り部。以下の土器実測図の色刷りも同様の凡例である。**

よって損壊していることから、遺構面が大きく削平を受けていたことは明らかである。

なお、『報告書』では１号甕棺墓と１、３号祭祀土壙間のスペースに遺構の表示はみられないが、当時の発掘現場の垂直写真（**巻頭図版２-ａ**）を見ると、４基の円形、長方形に掘り下げた遺構の掘り方が認められた。特に、後者は２基の長方形土壙が切り合っているように見えるが、これに関する記録が全く残っておらず、詳細は不明である。

**甕棺（巻頭図版３、第３図）**

上棺は、鋤先口縁の大型広口壺で、頸部と胴部の境に１条、胴中央部に２条のM字突帯がめぐる。口頸部が肥大化し口縁径は胴部最大径を上回る。

赤色顔料が口頸部の外面全体と内面の頸部上半部にかけて幅２cmほどの刷毛状の工具を用いて塗布され、外面では赤色顔料の上からさらに黒色顔料の塗布も施されている。

下棺は、胴部が長胴化し口縁は断面Ｔ字型でわずかに内径している。その直下に１条の三角突帯がめぐる。また、胴中央からやや下方にM字突帯がめぐる。

胴下部の突帯下に薄赤色を呈した顔料の飛沫痕が連続して観察された（**巻頭図版３-ｄ**）。粘土の水溶液にベンガラを混和し突帯に塗布したものと考えられ、その際に飛散して下面に付着した可能性が高い（**註10**）。赤色顔料の素材はベンガラが用いられており、塗布された時期については、焼成前と推定された（**註11**）。

外面器表に黒色顔料が塗布されていることは既に報告されているが、詳細に観察すると赤色顔料も所々に残っている。しかし、顔料の剥落が著しいため、本来、どのように塗布されていたかまでは明らかにできていない。

さらに内面でも赤色顔料の塗付が認められた。胴部の突帯から10cmほど下がった裏面で、指頭を押し付けたような楕円形の赤色斑状文が横一列に並んで施されている。指頭状の斑文は胴部を全周せずに、全体の３分の２程度まで廻ったところで止まっていて、施されていない範囲は、胴下部の穿孔が施された箇所のちょうど対面にあたっている。

これら器表面で観察された赤色顔料もベンガラと考えられるが、塗付された時期については焼成前と推定されている（**註11**）。

なお、甕棺の時期は、三雲・井原の甕棺編年のⅣ-B期（註12）に位置づけられる。

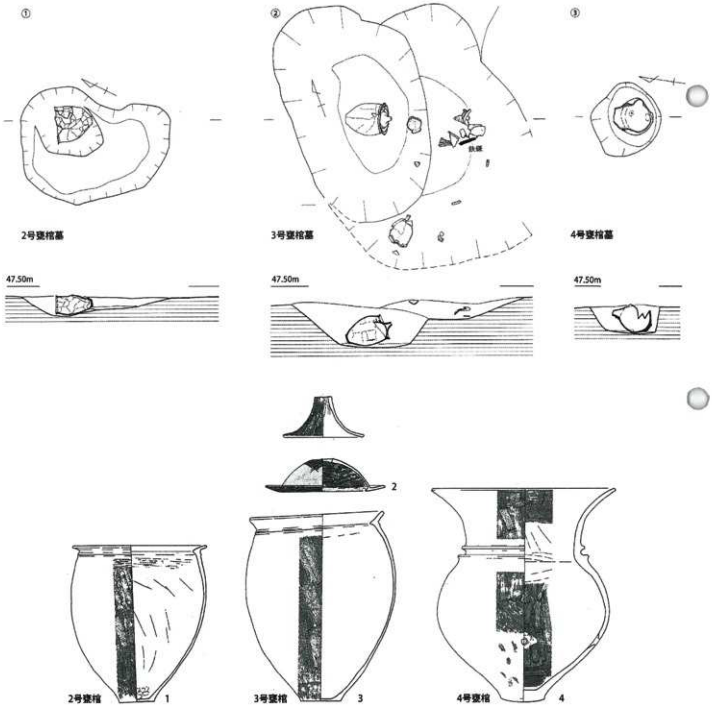
**２号甕棺墓（第４図①）**

１号土壙墓と２号土壙墓の間で検出した単棺の小児用甕棺墓で、不正形の１次墓壙の北東端に浅い２次墓壙を掘って納める。

**土器**　胴上端部がわずかに内傾し、逆Ｌ字の口縁端部は少し上向きとなって「く」の字状に外反する兆候がみられる。底径は器高に比べるとやや大きめである。三雲・井原遺跡の甕棺編年では、Ⅳ-B期に位置づけられる。

**３号甕棺墓（第４図②）**

１号溝を切って営まれた小児用甕棺墓で、高さ57.7㎝の甕を下棺、高さ27.3㎝の丹塗磨研高坏を蓋として使用していた。『報告書』では、２号祭祀土壙をこの甕棺墓の祭祀土壙と位置づけてい




**第４図　２～４号甕棺墓実測図（1/50）および甕棺実測図（1/10）『井原塚廻遺跡』第５～９図から転載**

るが、遺構は相互に切り合い関係にある。甕棺と、祭祀土壙から出土した甕を比較すると、甕棺の口縁は、「く」の字に屈曲反転しており、逆し字形を呈する祭祀土壙の甕よりも新しいことからこの甕棺墓が2号祭祀土壙よりも後出する関係にあると考えられる。

**土器**　甕の胴上部が内傾し、口縁部は「く」の字に反転して内湾ぎみに立ち上がるもので、外面はハケ仕上げで終えている。

高坏（**巻頭図版4-a**）は、坏部が深めで半球状を呈し、口縁部は長く先端は垂れている。脚部は脚柱が短めで内部には粘土が充填されている。三雲・井原遺跡編年のⅣ－C期に位置づけられる。

**4号甕棺墓（第4図③）**

口頸部を打ち欠いた広口壺を棺体とした単棺の小児用甕棺である。

**土器**　壺は底部がレンズ状に丸く膨れており、頸部の締まりは緩く、境界部に断面「コ」の字状の突帯が2条めぐる。内外面ともハケ調整痕が鮮明に残っており、三雲・井原遺跡のⅥ-A期に位置づけられる。

**（2）土壙墓**

**1号土壙墓（第5図1）**

1号甕棺墓の南に並ぶ土壙群の一つで、全長2.52m、幅1.38m、深さ18cmの不正長方形を呈し、「報告書」でも土壙墓とされた。内部が2段掘りになっていることから、木棺墓であったと考えられるが、棺の輪郭は不正形となっていて詳細は明らかでない。

墓壙の北西端近くで、丹塗磨研甕の下半部が倒置状態で出土した。破砕供献されたと考えられ、弥生中期後半の墓であることがわかる。

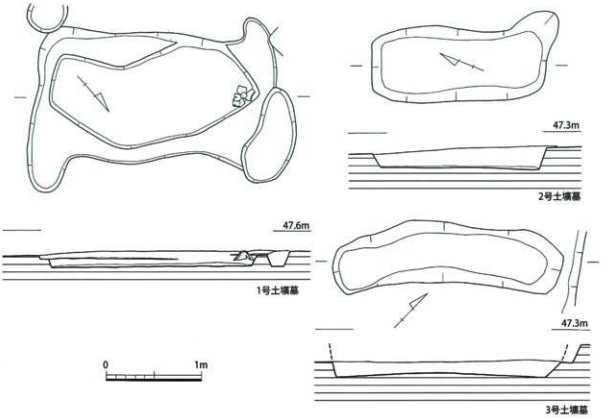
**出土土器（第12図3）**　丹塗磨研された甕の胴下部である。外面には横方向の丁寧な研磨が施される。破断面に穿孔の痕跡が認められる。

**2号土壙墓（第5図2）**

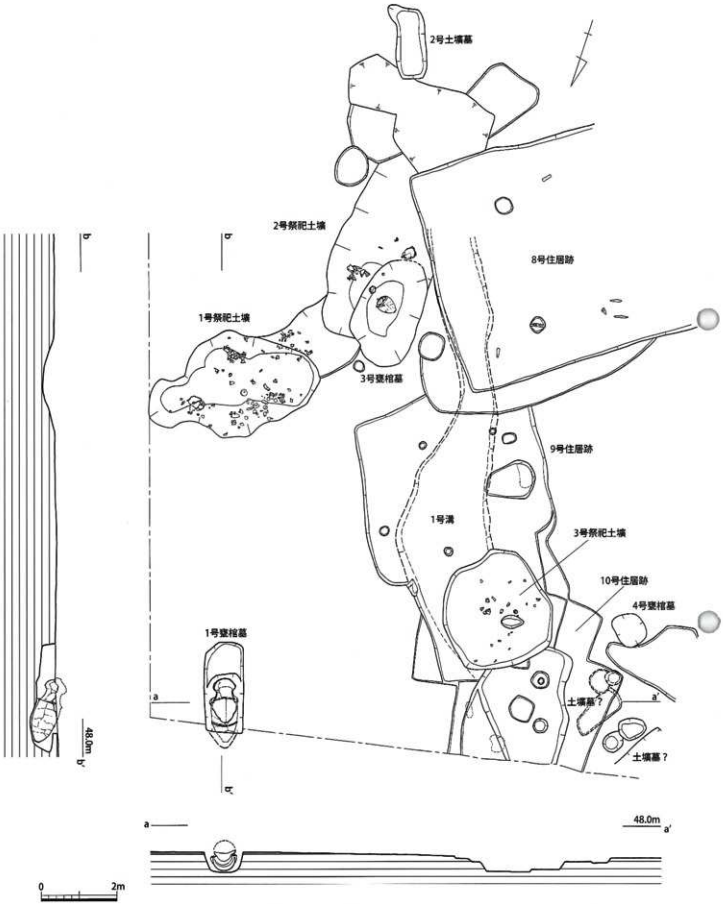
1号墓と同じく南北に並ぶ墳墓群の北端に位置し、全長1.85m、幅82cm、深さ25cmを測る。時期を示す資料は出土していないが、1号土壙墓、2号甕棺墓とはさほど時期を置かずに埋葬されたものと考えられる。

**3号土壙墓（第5図3）**

1号甕棺の南西部にやや離れた位置で検出され




**第5図　土壙墓実測図（1/40）**




第６図　１号甕棺墓と祭祀土壙群、１号溝との関係（1/100）

た細長い土壙で１号住居の床面から検出された。長さ2.43m、幅63cm、深さ35cmを測る。『報告書』では取り上げられていないが、２号住居跡の南端近くで検出されている土壙（墓）とともに墓群を形成した土壙墓と考えられる。

### （3）祭祀土壙と１号溝

**遺構（巻頭図版1-b、第６図）**

１号甕棺墓から南に5.2m離れた位置で１号祭祀土壙と２号祭祀土壙が、一部が切り合いながら縦長に並んで検出され、そのさらに北に5.3mほど離れて３号祭祀土壙が検出されている。

１号祭祀土壙は長さ4.5m、幅2.8mの不正長楕円形の土壙で、埋土から袋状口縁壺、有蓋脚付短頸壺、短頸壺などが器表面の保存状態を良好に保ったまま出土している。

２号祭祀土壙は、不正隅丸方形の土壙で、埋土から甕、袋状口縁短頸壺が良好な保存状態を保って出土した。３号甕棺墓と切り合い関係にあり、３号甕棺墓に先行して掘削されたと考えられている。

そこで、改めて各遺構の切り合い関係を確認するため調査時の遺構配置原図を確認したところ、３号祭祀土壙を切って営まれた古墳時代の８号、９号、10号住居跡の下面に、これらに切られて南北方向に伸びる溝（１号溝）が存在していたことがわかった（**第６図**）。この溝は３号祭祀土壙にも切られていて、これら遺構群の中で最も古いことになる。

さらに、１、２号祭祀土壙から出土した丹塗磨研土器片の一部が相互に接合し、部位は異なるものの１号溝出土土器と同一個体であった可能性を有する土器片も確認できたことから、他の土器片についても再度観察を試みた。

１号溝や祭祀土壙の埋土には古式土師器も出土しているが、これは切り合った住居跡の土器が混入したことに起因すると考えられた。特に10号住居跡では床面が階段状に深く掘り下げられており（**第６図a-a'断面**）、１号溝も一緒に掘り下げられたとみられる。

１号溝は、実測図では８号住居跡の中途で途切れていたが、現場の垂直写真で確認してみると、溝の埋土である黒色土層はこの住居跡の南端近くまで続いていたことがわかる。さらにここで分枝し、一方は東に屈曲して1、２号祭祀土壙下まで伸びてさらに東に続く。このことから１～３号祭祀土壙はいずれも１号溝の埋没後に、これを切って掘り込まれたと考えられる。

**出土土器（第７～10図）**

１～３号祭祀土壙では、新たに破片が接合できたことで、土器の形状がより詳細に把握できたものや、新たに図化できた土器もあり、図化掲載できた土器の総点数は47点となった。

実測図を掲載した土器のなかでも甕２点（28, 29）以外は全て丹塗磨研土器で、全体に占める割合は極めて高い。

丹塗磨研土器は、胎土にきめ細かな粘土が用いられ、器壁は薄く丁寧に研磨が施された精製品が多い。

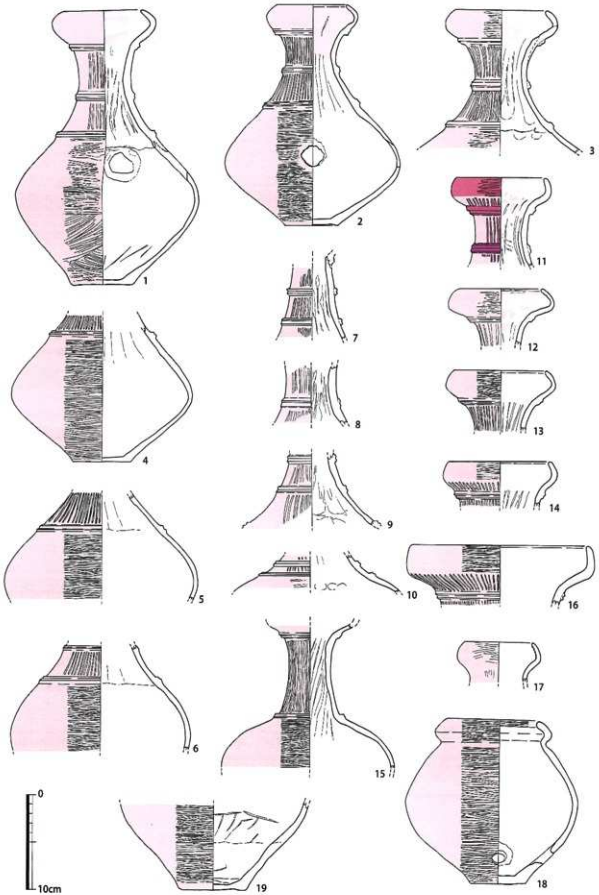
器種構成としては、高坏と袋状口縁壺の多さが目を引く一方、甕、広口壺、鉢の割合は低く、大型器台は出土していない。

壺、甕には打ち欠きや穿孔の痕跡を持つものが多く、また、高坏、袋状口縁壺では、口頸部や坏部に対して脚部や胴部など土器下半部の出土量が少ない傾向が見られる。

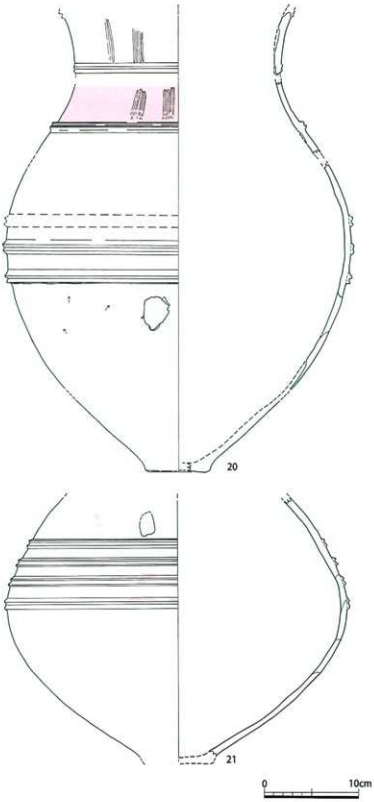
出土した土器は、残存状況の良し悪しが個体によって明瞭で、器表面の残存状態が良好な土器群（A群；１～６，15，18，19，22～27，31～37，41，47）と、残存部位が少なく器表面の劣化が著しく進行した土器群（B群；７～14，16，17，20，21，28，29，38～40，42～46）に分けることができる。A群の多くは、１～３祭祀土壙の出土品で丹塗り状態が良好な状態を保って出土したものであるのに対し、B群は広範囲に散乱して出土したものが多く、異なる祭祀土壙から出土したものが接着したものもある。

なお、10は２号住居跡の埋土から出土したもので、参考資料として掲載した。

**袋状口縁壺（１～19）** 胴部は扁球状で、細く括れた頸部から口縁部に向けて大きく反転し膨らんだ後に内傾して収束する。これまで三雲・井原遺跡（番上Ⅱ-５区上器溜等）で出土したものより口頸部が小ぶりで、胴部から口頸部にかけての絞り込みが著しく顕著で内傾度が大きいのが特徴である。A群の土器は、胴部から頸部にかけて直線的にすぼまる傾向が強く、通常の袋状口縁壺の頸部に見られるようにM字突帯が上、中、下に各




第７図　祭祀土壙、１号溝出土土器①（1/4）




第８図　祭祀土壙、１号溝出土土器②（1/4）

一段の３条に配されている（第７図）。

これに対して、Ｂ群は、頸部がＡ群よりもさらに細く絞り込まれており、胴部から頸部にかけて外反ぎみに成形されていて、曲線的な輪郭を有するのが特徴といえる。また、Ｍ字突帯間の間隔が狭く、上下二条ずつの計４条の突帯を配するものが多く、縦方向の研磨間隔も密に施されている。

11では、口頸部に縦方向の研磨の替わりに赤色顔料による塗彩が施されている。

15は、胴部と頸部との境の稜が明瞭で、頸部の上端と下端に各１条のＭ字突帯が配される。

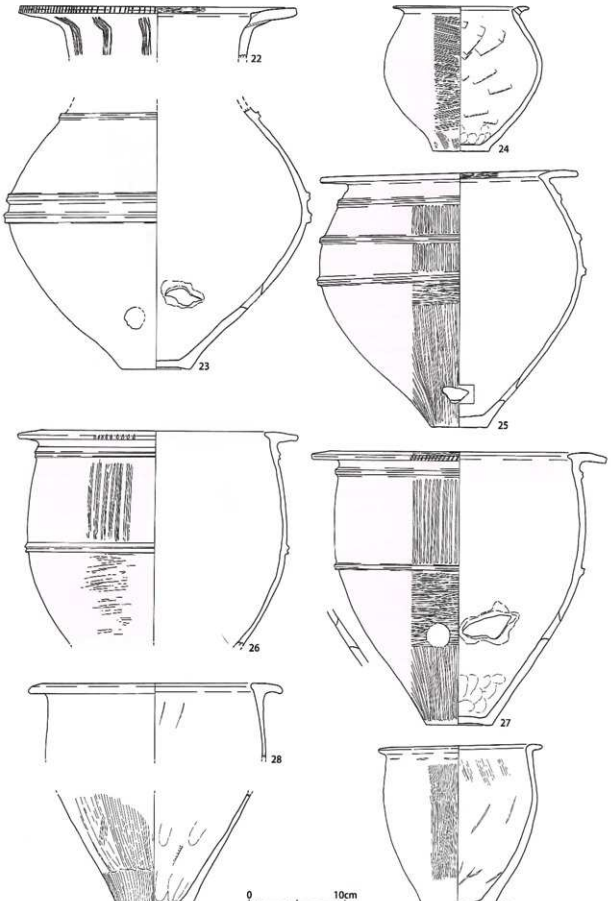
16は、大型の袋状口縁壺の口縁で、口縁の内傾度は甘く、調整も粗い。

17は、ミニチュア的な袋状口縁壺片で、18は、袋状口縁を有する短頸壺である。

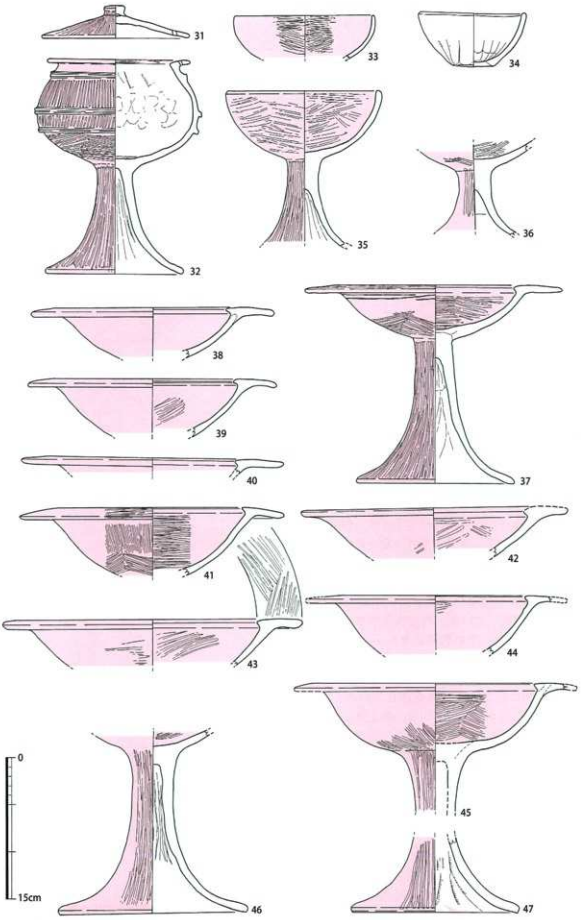
19は、袋状口縁壺の胴下半部と推定したが、器壁が厚く胴部の形状が丸みをもっていると考えられ他の器種である可能性もある。

**広口壺（20～23）**　20、21は１号祭祀土壙の西縁近くから集中して出土した、いずれも鋤先口縁を持つ大型の広口壺と考えられ、胴部最大径が60cmほどになる。残存量、部位が少ないため断片から復原的に図化したが、『報告書』よりも復原率が向上した。

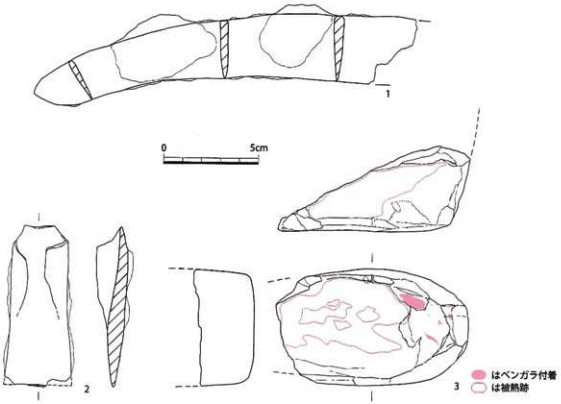
20は、やや胴長で胴の中位に少し間隔の広い３条、頸部にも３条のＭ字突帯を配するものと考えられる。頸部の一部に赤色顔料が残存付着している。




第９図　祭祀土壙、１号溝出土土器③（1/4）




第10図　祭祀土壙、1号溝出土土器④（1/4）



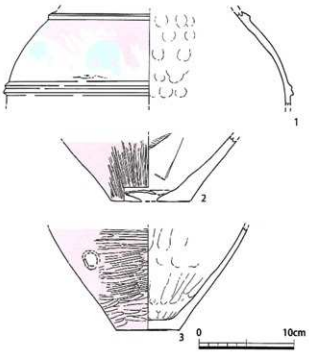

第11図　祭祀土壙、1号溝出土鉄器石器実測図（1/2）

21は胴部が扁平ぎみで、中央部から肩にかけて4条のM字突帯をめぐらせる。頸部から胴部にかけて赤色顔料が斑状に付着しており、頸部に丹塗りが施された際に顔料が垂れたものと考えられる。

同類の大型広口壺の出土は糸島地方に集中しており、20は、三雲番上遺跡Ⅱ-5の土器溜り出土壺（第88図26）、21は、同遺跡土器溜り出土壺（第90図30，32）や飯氏遺跡Ⅲ区44号甕棺上棺などに類例がある。

22，23は中型の広口壺である。22は器壁が厚手で、頸部に暗文状の線刻を施している。23は頸部より上を打ち欠かいている。胴上部に斑状に赤色顔料が付着していることから、頸部から口縁部にかけて丹塗りが施されていたものとみられる。

**無頸壺（24，31，32）**　24は、無頸壺で、口唇部に紐通し孔があることから有蓋土器であることがわかる。口唇部はわずかに上方に跳ね上がる。31，32は、有蓋脚付の無頸壺と蓋で、1号祭祀土壙から出土した。一対の製品と考えられる。無頸壺は外面に丁寧な研磨を施し、さらに3条のM字突帯の間には細かな縦方向に暗文状の研磨も施




第12図　調査地点出土弥生土器（1/4）

す。蓋外面は放射状の研磨で仕上げている。同種壺の類例は少ないが、当該資料はそのなかでも端正なプロポーションと研磨、塗彩の美しさのいずれをとっても完成度が高い。

**甕（25～30）** 25～27は、丹塗磨研が施された中型甕で胴部が大きく張る。25には3条のM字突帯がめぐる。28～30は、中～小型甕で外面はハケ、ナデで仕上げている。

**埦・鉢（33～36）** 33は器壁が薄い埦で、内外面ともに丹塗磨研で仕上げる。34は完形の小型鉢である。外形はシャープさに乏しく器壁も厚手で、ナデで仕上げている。表面に赤色顔料が斑状に付着する。

35、36は、脚付埦である。埦部は半球形を呈し、内外面ともに丁寧な研磨が施される。36は脚上部から埦部にかけてで、残存部位の形状から35と同形品とみられる。

**高坏** 袋状口縁壺とともに出土数が多い。B群の土器は坏部の径が25～28cm程度と小型で坏部が浅めのものが多く、これらは外表面の剥落劣化が著しいものが多い。

**出土鉄器・石器（第11図）**

既報告の鉄鏃、袋状鉄斧各1点の他に、L字形石杵片1点の出土を確認した。現在、鉄鏃と袋状鉄斧の所在が不明であるため、『報告書』から転載した。

**鉄鏃（1）** 2号祭祀土壙から出土した。残存長20.1cm、幅3.6cmを測る。基部は破損しており、刃部は長く直線的に伸びて先端部が緩やかに屈曲する。

**袋状鉄斧（2）** 3号祭祀土壙から出土した。長さ8.4cm、刃部幅3.6cmを測る。袋部から刃部にかけての身厚が厚いのが特徴である。

**L字形石杵（3）** 2号祭祀土壙の埋土から出土した。硬質砂岩製の磨製石器片で、側面にも丁寧に面取り・研磨調整が行われている。平滑な擦過面の窪みに赤色顔料が付着しており、赤色顔料の精製に用いられた石杵片と考えられる。

擦過面が長楕円形を呈していることから、本来の形状は側面観がL字形をなす石杵であったと推定される。残存長10.0cm、幅7.1cm、高さ3.9cm。表面に被熱した痕跡が認められる。

付着していた赤色顔料はベンガラであることが確認されている。

なお、顕微鏡の観察結果では、パイプ状粒子は観察されていない。

## 2．その他の遺構・遺物

### (1) その他の遺構出土土器（第12図2，3）

土坑や住居跡からも弥生中～後期の丹塗磨研土器片が出土しており、削平された墳墓、祭祀遺構からの出土品とみられる。遺存状況が良好な2点を報告する。

1は、広口壺の胴上部で、頸部と胴部の境をめぐる突帯から胴部にかけて赤色顔料が塗布されている。おそらく口頸部にかけても丹塗りが施されていたと考えられる。3は、丹塗磨研甕の底部で、底部に穿孔の痕跡が残る。

# Ⅳ．まとめ

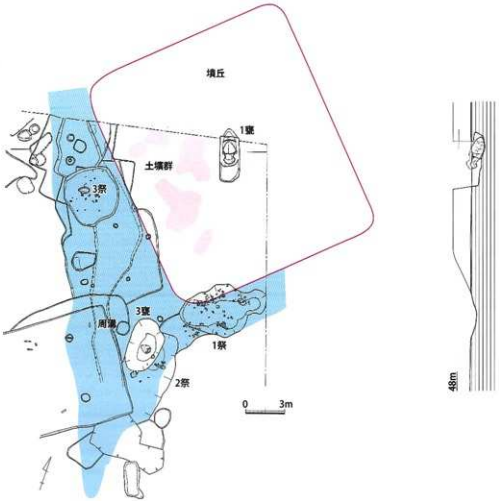
## 1．1号甕棺墓と周辺の原風景

### (1) 区画墓の中心主体としての1号甕棺墓

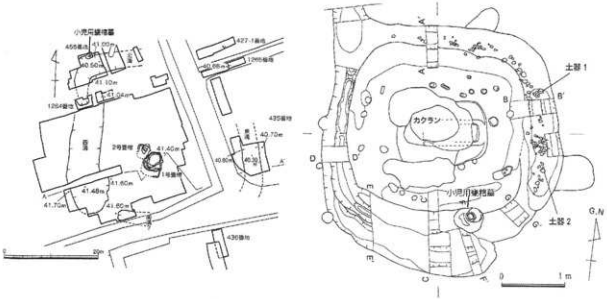
甕棺の西と南で検出された祭祀土壙群に切られていた1号溝は、1号甕棺墓をめぐるように配され、その南北主軸は1号甕棺墓の主軸方位に対応して並行ないしは直交方向を意識しているとみられることから、1号甕棺墓域の区画溝と考えられる。甕棺から副葬品は出土していないが、棺の内外に赤色顔料や黒色顔料が塗布されるなど通常の甕棺では認められない塗彩が行われていることを考慮すれば、区画墓の中心的埋葬棺であったと考えられる。

1号甕棺墓が区画墓の中央に位置することを前提として、区画溝から推定される南および西側の周縁部を反転して区画域を復原すると、一辺13～14mの方形プランを想定することができる（第13図）。このとき、小児棺である3号甕棺は、区画の南西隅角に埋葬されたことになる。小児甕棺が区画墓の縁辺部に寄り添うように後続して営まれる例は、構築時期が近い三雲南小路墳丘墓や平原5号墓でも確認されていて、当地における葬送のあり方の一様相としてとらえることができる（第14図）。

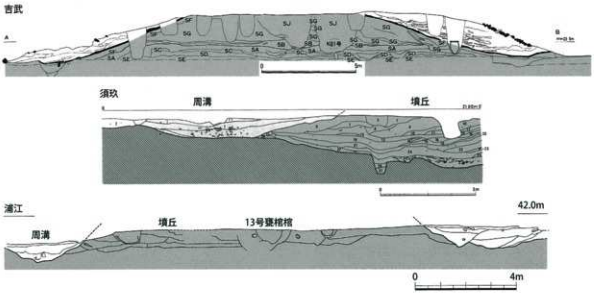
1号甕棺墓は、遺構面直下で上棺の上方が破壊された状態で検出されている。成人甕棺墓の場合、墓壙上面から甕棺の上端まで一定の深さを確保して埋葬されるのが一般的であることを考えれば、甕棺の上面は埋葬時の原状から大きく削平を受け




第13図　1号甕棺墓墳丘推定図（1/300）




第14図　三雲南小路王墓（左）と平原５号墓（右）における小児甕棺の配置




**第15図　吉武樋渡墳丘墓墳丘断面図（上『吉武遺跡群Ⅷ』1998 福岡市教育委員会から転載）**
**玖岡本遺跡第１次調査墳丘墓断面図（中『須玖岡本遺跡』1995 春日市教育委員会から転載）**
**浦江遺跡・墳丘墓断面図（下『浦江遺跡第5次調査2』2005福岡市教育委員会から作成）**

ていたと考えられる。

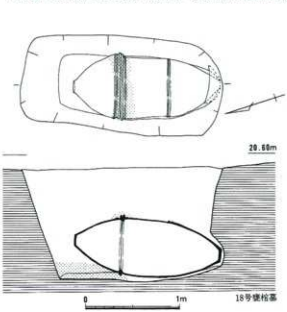
このことは、周囲で確認された小児甕棺墓の検出レベルと比較することからも追認することができる。通常、成人甕棺墓よりも浅く埋葬されることが多い小児甕棺墓（2，3，4号甕棺墓）の、棺底の深さが標高46.7～47.1mあたりで（**第4図**）、1号甕棺墓（46.6m）とさほど変わらない深さに埋葬されており、1号甕棺墓周辺は他の地点よりも深く削平されたとする推測を裏付ける。

また、調査地点で検出した古墳時代の竪穴住居跡は壁面が残っているなど比較的良好に残存しているにも関わらず、区画内では竪穴住居は検出していない。住居跡は削平されてしまったか、あるいはもともと住居跡がなかったことになる。後者であれば、甕棺の盛土が阻害要因となって竪穴住居の建設が見送られた結果とも考えられる。

さらに、調査地点の「ツカマワリ」という地名は、かつてこの付近に墳丘を伴う古墓が存在したことを想起させ、これらのことを勘案すれば1号甕棺墓は墳丘を伴う区画墓であった可能性が極めて高いといえる。

ちなみに、墳丘の高さを復原するに足りる資料は持ち合わせていないが、1号溝の断面を観察すると、溝の底から墳丘にかけての傾斜は30度ほどと比較的なだらかで、急勾配の高い墳丘を想定することは難しい（**第6図**）。

弥生中期後半の近隣地域の墳丘墓を参考に検討してみると（**第15図**）、吉武樋渡遺跡（福岡市）の墳丘墓では30度（**註13**）、須玖岡本遺跡（春日市）7次調査の墳丘墓では、残存する墳丘斜面裾の勾




**第16図　飯氏馬場18号甕棺墓実測図（1/40）**

配は15～20度（註14）、浦江遺跡（福岡市）の区画墓（註15）では33度を計測した。溝底近くであるために勾配が墳丘の上半部よりも緩やかになることを勘案しても、墳丘の傾斜は45度を越えるような急な勾配を呈していたとは考えにくい。

また、幕墳上面から甕棺までの幕墳の深さについて、1号甕棺墓と類似する隅丸長方形の細長い1次墓壙をもつ飯氏遺跡Ⅲ区18号甕棺（福岡市）では、甕棺上部までの深さは地表から概ね50cmであった。また、浦江遺跡では中心的埋葬棺となる13号甕棺の深さが1mほどと推定されている（註15）。また、主体部が墳丘盛土内ではなく、地山下に収まっていることも考慮する必要があるだろう。これらの状況を勘案すれば、現状で推定される墳丘高はせいぜい1～1.5m程度ではないかと考える（第13図）。

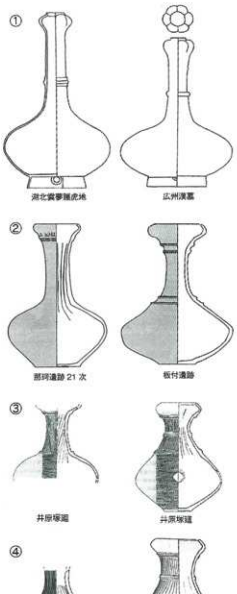
### （2）出土土器

周溝、祭祀土壙から出土した丹塗磨研土器からも新たな知見が得られた。

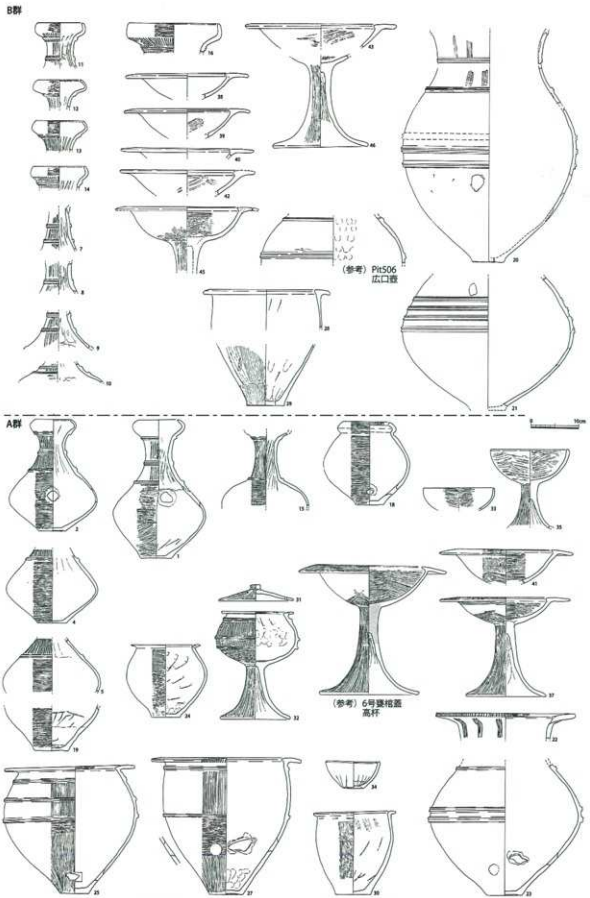
丹塗磨研土器は、逆L字形口縁甕、広口壺、袋状口縁壺、短頸壺、高坏などで構成される須玖Ⅱ式期の土器群で、このうち、前三器種は糸島地方を中心に分布しそのバリエーションにも富むことから、石橋新次氏によって特に「糸島型祭祀用土器」と命名された（註16）。

井原塚廻遺跡から出土した一連の祭祀土器群のうち、注目されるのがB群の土器群である（第18図）。この土器群の残存状態は、A群に比べ著しく悪いことを指摘したが、その要因として墳丘や1号溝（区画溝）に遺棄された後、一定期間風雨にさらされるなどで劣化が進み、さらに後の祭祀土壙の掘削によって攪拌され、土器の劣化・破損に拍車がかかったことによると考えられる。

一方、A群土器は、土壙に遺棄された後に速やかに埋納されたことで土器本体は極めて良好な状態を維持されたと考えられる。A群土器が出土した祭祀土壙1，2，3では、後世の遺物の混入がみられず、また、土器表面の残存状況は3号甕棺墓の蓋に使用された丹塗磨研の高坏とよく似ており、土器の埋没経過の類似性をうかがわせる。この推定が正しければB群土器はA群土器よりも古相に位置づけることが可能となる。B群土器のうち、袋状口縁壺は、頸部が著しく細く絞り込まれ、また、頸部をめぐるM字突帯は上端と下端に各2




**第17図　韓頸壺～袋状口縁壺の変化イメージ（常松幹夫氏作成図に糸島地方の袋状口縁壺を加えて作成）**




第18図　井原塚廻遺跡祭祀土壙出土A群（下段）・B群（上段）土器比較図（1/8）

条、計4条を配したものがみられるのが特徴である。この特徴を有する袋状口縁壺は、これまで板付遺跡井戸出土土器（第17図②）の1例が知られるのみであった。しかし、今回の発見によって同様の特徴を有する袋状口縁壺が糸島～福岡平野に共通して分布することが確認された。また、このタイプの土器は従来から知られる典型的な袋状口縁壺（第17図③～④）よりもわずかながら時期的に先行して出現した可能性が高いことになる。

蕨頭壺に類似する古層の袋状口縁壺が糸島地方でも確認できたことは、この種の土器の出現の契機や時期を考える上でも重要と考える。

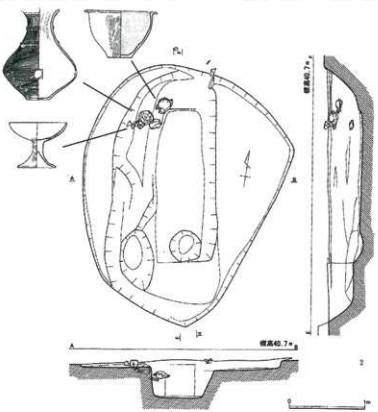
常松幹雄氏は、袋状口縁壺の出現経緯を検討し、国内には祖形となるべき器種が見いだせず、突如として出現していることからその起源を大陸に求め、秦～前漢代に中原一帯で盛行した蕨頭壺である可能性を指摘し、弥生中期後半（須玖Ⅱ式期）に楽浪郡を介してもたらされたと考えた（註17）。

また、中園聡氏は、袋状口縁壺を含めた丹塗精製土器群出現の背景には、朝鮮半島における楽浪郡設置によって活性化した北部九州社会への漢文化の流入があり、ちょうど須玖Ⅱ式の成立と相まって、漆器やそれに伴う大陸の食器文化の情報が「丹塗り磨研という「色」、「つや」による食器の類別化」の方式として新たに採用された可能性があると指摘し、その根底には、宇野隆夫氏が提起した「中国の国家的社会システムを高いレベルで理解し目的意識的にそれに近づこうとする」北部九州倭人の強い意志が働いたとの見解を示した（註18）。

さらに、石橋新次氏は、弥生中期後半以後の北部九州社会において、大陸との外交・経済の中枢としての役割を担った伊都国ならではの、内的欲求から創出された極めて強い政治性を帯びた祭祀土器と指摘する。

### (3) 木棺墓の出現時期と墓地の構成

1号甕棺墓の周辺で1～3号祭祀土壙が掘削された要因について、各祭祀土壙は墳丘裾に寄り添うように配されていることから、土器の埋納要因となった祭祀の対象が区画墓側にあったと考えられる。この場合に留意されるのが、1号甕棺墓の西～西南側で検出された土壙群である。これらが




第19図　三雲堺遺跡木棺墓（1/50）と出土土器（1/10）

土壙墓である可能性を指摘したが、この場合、祭祀土壙群がこれら墓群に対する祭祀儀礼のなかで廃棄された可能性が浮上する。

井原塚廻遺跡の１号木棺墓には丹塗磨研土器が供献されていたことから、中期末の木棺墓であることを明らかにしたが、すでに三雲・井原遺跡では、弥生時代中期後半～末にかけて、成人用の大型甕棺墓に替わって木棺墓が導入され、急速に普及していったことが指摘されている（註19）。

三雲堺Ⅱ－30地点の２号木棺墓（第19図）では、頭部に３条のM字突帯をめぐらせた袋状口縁壺が棺外に供献されていた。この袋状口縁壺は井原塚廻遺跡A群のものと特徴が近似しており、A群土器の出現期がまさに糸島地方において成人用棺としての甕棺墓が木棺墓へと移行する過渡的段階にあたるものと考えられる。そうなると井原塚廻遺跡の１～３号祭祀土壙の祭祀対象は区画内に営まれた土壙（墓）であった可能性が高まるのである。

この場合、区画墓は１号甕棺の埋葬を契機として構築された後にも引き続き複数の埋葬棺の埋葬空間としても使用されたことになる。よって墳丘墓の位置づけは、当初想定していた特定個人墓（註20）ではなく、特定集団の区画墓（註21）ということになる。

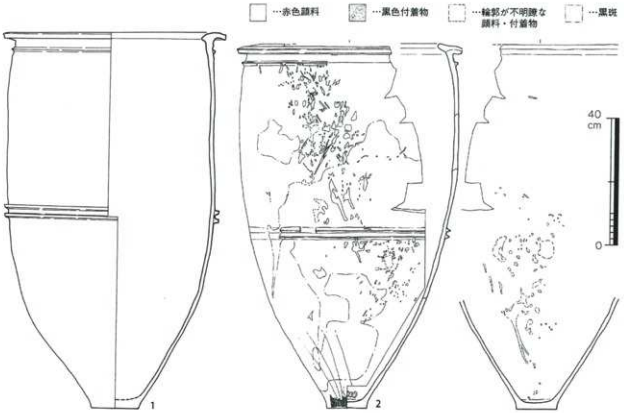
なお、井原塚廻遺跡では、報告された土壙墓以外にもさらに多くの土壙墓が存在した可能性があり（第2図）、これらを含め一定期間にわたり継続的に営まれた、より広範囲に展開した墳墓群を想定する必要があるだろう。

井原塚廻遺跡の立地と成立時期から考えると、この墓地の造営主体は、当該地域の拠点集落である三雲・井原遺跡の成立を契機として、その南東部に新たに形成された衛星集落であろう。１号甕棺墓を中心とする墳丘墓は、その有力集団墓と考えられ、その造墓時期は中期後半となり、三雲南小路王墓の造墓に先行すると考えられる。

## ２．赤色顔料を用いた祭祀

### (1) 甕棺へのベンガラの塗彩

１号甕棺では、上下棺ともに内外に赤色顔料の




第20図　赤色顔料の塗付が確認された井原堺遺跡1号甕棺（左　1/12）と吉武遺跡9次調査15号甕棺（中・右　1/12）

塗彩が確認された。用いられた顔料はベンガラで、焼成前に棺彩色されたものと考えられる。甕棺の製作段階で塗彩を施して他の甕棺との差別化を意図した事例のひとつとして注目したい。

なお、類似する赤色顔料塗布甕棺の例は、筑後平野において、1980年代に上川原遺跡（朝倉市）、栗田遺跡（筑前町）で相次いで報告されている（註23）。これらを詳細に検討した馬場弘稔氏は、土器製作過程に着目し、他の丹塗磨研土器などとともに、非日常的な「祭祀的環境」のもとで製作されたことによる偶発的要因によって引き起こされた事例とした。

また、安国寺遺跡（久留米市）の発掘調査でも同様の甕棺の出土が確認され、萩原裕厚氏は指頭状の赤色顔料の付着痕などが確認されたことなどによって、顔料が付着したまま甕棺が製作されたためとするなど、その要因について馬田氏の見解を追認する見解を示した（註24）。

井原塚廻遺跡出土甕棺では、胴部の突帯にのみ赤色顔料が塗彩されており、また甕棺内面にも塗付が行われている。この甕棺は器高が1mを越えるものであるから、周囲において、赤色顔料の塗彩行為が行われていたにせよ、意図的でなければ棺内にまで飛沫が付着することを想定することは難しい。さらに黒色顔料の塗布も認められること、同様に上棺の広口壺にも内外面に顔料の塗付が行われたことは、甕棺の製作過程において明確な意図をもって塗彩・塗付が行われたと考えるべきであろう。同期の甕棺で他に類例が見つかっていないことは、墳丘墓の中心的埋葬主体であることと併せて、棺体への塗彩・塗布による被葬者の差別化がその背景にあるものと推察される。

甕棺の棺内における赤色顔料の塗彩例は、新たに井原坍遺跡1号甕棺墓（中期後半）でも確認した。（第20図1，巻頭図版3-e）。底部内面に不正円状に径10cmほどの範囲にベンガラが塗彩されていた。顔料の発色は黒みを帯びた赤色で、丹塗磨研土器にみられる鮮明な朱赤色とは異なる点は、階層差によるベンガラの材質の優劣や、塗彩の目的・意図とも関係しているかもしれない。

また、高祖山系を越えて東隣りの早良平野側に位置する吉武遺跡9次調査15号甕棺墓においても中期後半の甕棺に赤色顔料が塗彩されている例が報告されている（註22）。甕棺の内外に赤色顔料が塗布された痕跡がみられ、なかには、「指先に顔料が付着した状態で甕棺にさわった」と解されるものもあり、井原塚廻遺跡の赤色顔料の付着状況と酷似するものが認められるのは、当該地域間における儀礼の共有という視点において注目したい（第20図2）。また、これらがいずれも中期後半の甕棺であることから、この種の塗布・塗彩行為出現がほぼ同時期であることも注意されるところである。

### （2）石杵の出土

1号甕棺墓周溝から出土した遺物として新たに石杵が確認された。擦過面にはベンガラが付着しており、葬送儀礼における赤色顔料の使用に関連するものとして注目される。

三雲南小路遺墳丘墓では、周溝から水銀朱が内面に付着した弥生後期前半の鉢や甕が滑石製のL字形石杵とともに出土しており（註25）、文政5（1822）年に中期末の1号甕棺が発見された際には、墓壙中からは水銀朱を詰めた小壺が出土したことも記録されている（註26）。

浦江遺跡（福岡市）で発見された墳丘墓の中心的な埋葬棺とされる13号甕棺の棺内からは水銀朱塊が検出されるなど（註27）、伊都国とその周縁においては、弥生時代中期後半から後期にかけて、上位階層の葬送儀礼において水銀朱の多様な使用が認められる。

この頃、北部九州で使用された水銀朱の産出地の大半は中国産であることが、イオウ同位体分析によって明らかとされている（註28）。

常松幹雄氏は、前述の袋状口縁壺やヒョウタン形土器の出現の背景として、中国の神仙思想の北部九州社会への伝播を想定しているが、大陸産の水銀朱を用いた各種儀礼もまた、この影響の下に新たに開始された可能性があるだろう。階層隔差の顕在化によって下位の有力層墓では、希少な水銀朱の代替品としてベンガラが用いられたことも想定される。

## 3.農工具の供献

祭祀土壙群から鉄鏃と袋状鉄斧が出土していることにも留意しておきたい。

送葬に伴い農工具が副葬・供献される事例は弥生中期後半以降顕著となるが、糸島地方では時期

は少しさかのぼるが、三坂七尾遺跡（糸島市）の６号祭祀土壙で太形蛤刃石斧の出土例がその初見である（**註29**）。この土壙からは、広口壺、打ち欠かれた甕棺の口縁など、葬送儀礼の関連遺物が出土するとともに、太形蛤刃石斧片が、数点出土している。これらも送葬儀礼に伴い土壙中に意図的に遺棄された可能性が考えられる。

三雲南小路王墓では、周溝に埋葬された小児甕棺の棺外に石包丁の未成品が供献されていた。これら農工の実具が墳墓の周縁で廃棄・埋納される意味については、現在のところ十分な検討資料を持ち合わせていないので、今後の更なる検討課題としたい。

註

1．林覚「井原塚廻遺跡」1993　前原町教育委員会
2．岡部裕俊「王墓の出現と甕棺」「考古学ジャーナル №451」1999　ニューサイエンス社
3．川村博「高祖遺跡群」1988　前原町教育委員会
上田健太郎「高祖遺跡群」Ⅲ　2001　前原市教育委員会
4．林覚「井原遺跡群」1986　前原町教育委員会
5．前原町教育委員会「前原町文化財分布地図」1972
6．調査を担当した角浩行氏から教示
7．岡部裕俊「井原地区周辺の古墳群」1994　前原市教育委員会
8．未報告　　伊都国歴史博物館所蔵
9．江崎靖隆「墳墓の変遷」「三雲・井原遺跡Ⅷ」2013　糸島市教育委員会
10.11　志賀智史志氏のご教示による。
12．本稿では、江崎靖隆「甕棺の編年」「三雲・井原遺跡Ⅷ」2013　糸島市教育委員会　の編年案に基づき、時期を記述する。
13．横山邦継「吉武遺跡群Ⅷ」1998福岡市教育委員会
14．平田定幸「須玖岡本遺跡」1995春日市教育委員会
15．常松幹夫「浦江遺跡　第５次調査２」2005　福岡市教育委員会
16．石橋新次「糸島型祭祀土器の成立とその意義」「北部九州の古代史」1992　有明文化を考える会
17．常松幹雄「ヒョウタン形土器の出現とその背景」「倭人の海道」2007　伊都国歴史博物館
18．中園聡「丹塗精製器群盛行の背景とその性格―東アジアの中の須玖Ⅱ式土器」「人類学研究10」1998
宇野隆夫「木製食器と土製食器－弥生変革と中世変革－」「古代の木製食器－弥生期から平安期にかけての木製食器」（発表要旨）1996　第39回埋蔵文化財研究会実行委員会
19．江崎靖隆「墳墓の変遷」「三雲・井原遺跡」2013　糸島市教育委員会
20．溝口孝司「甕棺墓地の移り変わり」「弥生のタイムカプセル」1998福岡市博物館
21．註２に同じ
22．羽方誠「甕棺に付着した赤色顔料－福岡市吉武遺跡出土例－」「福岡考古19号」2001　福岡考古懇話会
23．馬田弘稔「上川原遺跡」1982　甘木市教育委員会
馬田弘稔編「栗田遺跡（B地区）」1986　三輪町教育委員会
馬田弘稔「弥生時代の土器祭祀」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集上巻」1982　記念論文集刊行会
24．立石雅文　萩原裕房「安国寺遺跡の調査」「東部地区土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書２」1983　久留米市教育委員会
25．岡部裕俊・牟田華代子「三雲・井原遺跡Ⅱ」2002　前原市教育委員会
26．青柳種信「柳園古器略考」1822
27．註15に同じ
28．今津節生他「福岡県前原市域出土朱のイオウ同位体比」「三雲・井原遺跡」2006　前原市教育委員会
29．岡部裕俊・牟田華代子「三坂七尾遺跡」2000　前原市教育委員会

| 挿図番号 | 番号 | 器種 | 遺構名 | 法量 | | | | 基本調整 | | 外面色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 器高 | 口縁径 | 胴部最大径 | 底部径 | 外面 | 内面 | | | | |
| 3 | 2 | 甕棺（下棺） | 1号甕棺 | 112.6 | 79.6 | 70.0 | 15.2 | ナデ | ナデ | 桃褐色 | 良好 | 良好 | 内外面に赤色顔料<br>外面に黒色顔料 |
| 3 | 1 | 甕棺（上棺） | 1号甕棺 | 67.6 | 68.2 | 60.8 | 10.2 | ナデ | ナデ | 暗赤褐色 | 良好 | 良好 | 頸部は内外面ともに丹塗 |
| 4 | 1 | 甕 | 2号甕棺 | 42.7 | 36.4 | 36.6 | 9.6 | ハケ | ナデ | 明茶褐色 | 良好 | 良好 | |
| 4 | 2 | 甕（下棺） | 3号甕棺 | 49.1 | 35.2 | 39.1 | 10.6 | ハケ | ナデ | 茶褐色 | 良好 | 良好 | |
| 4 | 3 | 高坏（上棺） | 3号甕棺 | 27.3 | 31.4 | | 21.2 | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 4 | 4 | 広口壺 | 4号甕棺 | 57.7 | 49.8 | 46.6 | 11.6 | ハケ | ハケ | 茶褐色 | 良好 | 良好 | |
| 7 | 1 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | 29.0 | 8.3 | 19.3 | 9.0 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 内面は桃褐色 |
| 7 | 2 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | 23.4 | 90.7 | 18.3 | 5.6 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 胴部穿孔 |
| 7 | 3 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 9.7 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 7 | 4 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | － | － | 19.1 | 6.1 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 5 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 6 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | － | － | 20.3 | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 内面は暗褐色 |
| 7 | 7 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 8 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 9 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 10 | 袋状口縁壺 | 2号住居 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 内面は桃褐色 |
| 7 | 11 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 9.2 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 暗文状の彩色 |
| 7 | 12 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 8.6 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 13 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 9.7 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 磨滅著しい |
| 7 | 14 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 10.6 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 7 | 15 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | － | | 18.0 | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 16 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | 18.5 | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 7 | 17 | 袋状口縁壺 | 3号祭祀 | － | | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 7 | 18 | 袋状口縁壺 | 2号祭祀 | 17.4 | 9.6 | 18.2 | 5.8 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 7 | 19 | 袋状口縁壺 | 1号祭祀 | － | | | 6.7 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | 内面は黒灰色 |
| 8 | 20 | 大型広口壺 | 1号祭祀 | － | | 56.0 | 9.0 | ナデ | ナデ | 淡黄桃色 | 良好 | 良好 | |
| 8 | 21 | 大型広口壺 | 1号祭祀 | － | | 55.2 | － | ナデ | ナデ | 淡黄桃色 | 良好 | 良好 | 胴上部に穿孔 |
| 9 | 22 | 広口壺 | 1号祭祀 | － | 29.2 | － | － | ナデ | ナデ | 明褐色 | 良好 | 良好 | |
| 9 | 23 | 広口壺 | 1号祭祀 | － | － | 32.5 | 7.3 | ナデ | ナデ | 明褐色 | 精良 | 良好 | 胴部2カ所穿孔 |
| 9 | 25 | 甕 | 2号祭祀 | 26.9 | 27.4 | 28.7 | 6.0 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 9 | 26 | 甕 | 1号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 9 | 27 | 甕 | 2号祭祀 | － | － | － | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 胴部2カ所穿孔 |
| 9 | 28 | 甕 | 1号祭祀 | － | 23.0 | 23.1 | － | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 9 | 29 | 甕 | 1号祭祀 | － | － | － | － | ナデ | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 9 | 30 | 甕 | 1号祭祀 | 17.3 | 17.3 | 16.3 | 7.4 | ハケ | ハケ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 10 | 31 | 蓋 | 1号祭祀 | 3.4 | 15.7 | 17.7 | 14.6 | 研磨 | | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 32 | 脚付無頸壺 | 1号祭祀 | 22.7 | | － | 14.6 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | | | |
| 10 | 24 | 無頸壺 | 1号祭祀 | 15.4 | 14.4 | 16.3 | 5.9 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | |
| 10 | 33 | 椀 | 3号祭祀 | － | 14.7 | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 34 | 鉢 | 3号祭祀 | 5.8 | 11.5 | － | 5.0 | ナデ | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 35 | 脚付椀 | 1号祭祀 | － | 16.5 | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 36 | 脚付椀 | 1号祭祀 | － | | － | － | | | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 37 | 高坏 | 1号祭祀 | 21.0 | 27.2 | － | － | | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 精良 | 良好 | 脚部高　15cm |
| 10 | 38 | 高坏 | | － | 25.6 | － | － | | | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 39 | 高坏 | | － | 26.3 | － | － | | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 40 | 高坏 | | － | － | － | － | 研磨 | | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 41 | 高坏 | 3号祭祀 | － | 27.9 | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 42 | 高坏 | | － | － | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 43 | 高坏 | 3号祭祀 | － | 31.6 | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 44 | 高坏 | 3号祭祀 | － | － | － | － | | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 10 | 45 | 高坏 | 3号祭祀 | － | 28.8 | － | － | 研磨 | 研磨 | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | 坏部深　6.4cm |
| 10 | 46 | 高坏 | 3号祭祀 | － | － | － | 20.0 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | 脚部高　17.5cm |
| 10 | 47 | 高坏 | 3号祭祀 | － | － | － | 17.4 | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 12 | 1 | 広口壺 | Pit506 | | | | | ナデ | ナデ | 暗桃黄色 | 良好 | 良好 | |
| 12 | 2 | 甕 | 10号住居 | | | | | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |
| 12 | 3 | 甕 | 1号土坑 | | | | | 研磨 | ナデ | 赤褐色(丹塗) | 良好 | 良好 | |

※遺構名では、祭祀土壙を祭祀と標記。器面調整では、調整面のまたる調整方法のみ記載した。

**井原塚廻り遺跡出土土器観察表**

# 雷山神籠石「南水門」部の踏査結果及び雷山神籠石に関係する交通路について

瓜生　秀文（伊都国歴史博物館）

## Ⅰ．雷山神籠石について

雷山神籠石は福岡県糸島市雷山・飯原間の山中に築かれた東西300m、南北700mほどの城域をもつ古代山城である（第１図）。そしてそれは、雷山（標高955m）の北中腹約400～480mを測る２つの尾根に挟まれた緩やかな勾配の沢筋に位置する。この尾根は雷山支脈のなかでもとりわけ北方向に突き出ているため、糸島地方のみならず博多湾や玄界灘まで広く一望できる景勝の地となっている（写真１、２）。遺構としては、現在、谷の南北に築かれた水門とそれから東西に派生する列石群をみることができる。

## Ⅱ．雷山神籠石に関する研究史

### （1）.「神籠石」の研究史

「神籠石」[1]とは福岡県久留米市に所在する高良山神籠石に代表されるように、列石が宗教上の神域と合致していたこと、その基本構造が列石と水門遺構に限られていたために、霊域を示すモニュメントと解され、その名称となった。しかし、1960年代に調査された佐賀県武雄市のおつぼ山神籠石[2]で、列石上に土塁、そしてその前面に柵列の痕跡が確認されたことや、朝鮮半島の古代山城の構造との類似点が指摘されてからは、山城としての認識が一般的となった。現在では北部九州から瀬戸内海沿岸にかけての西日本一帯で約十数例が確認されている。

こうした神籠石系山城は、いつ頃、誰が、どのような目的で築城されたか定かではない。以前は弥生時代終末期（邪馬台国時代）の砦であるとか、筑紫君磐井が大和政権に対抗して築城させたもの、など諸説があったが、現在では朝鮮式山城と同様に７世紀の対外的な緊張関係の中で築城されたという理解に集約されつつある。ただし、その築城が大野城や基肄城などの「天智紀」に登場する朝鮮式山城に先行するのか、後出するのかは学界でも大きな問題となっている[3]。

先行説の多くは「日本書紀」の「斉明紀」４（660）是歳条「繕修城柵」の記事を神籠石系山城築城の根拠とする[4]。百済救援のために「朝倉宮」が造営され、それを拠点とする防衛網の一環として神籠石系山城が築城されたとする説である[5]。多くの神籠石系山城は663年の白村江の戦い後に未完成で放棄され、一部は修築され朝鮮式山城を補完するように並存したと考えられている。

後出説は、城の新旧の基準を城壁の防衛機能の面から考えず、石材加工技術の優劣に置く。また、その築城目的も対外防衛的な色彩が薄れ、「大宰・総領制」との関連[6]や律令制化に伴う地域支配の拠点へと変化していったと考えられている。

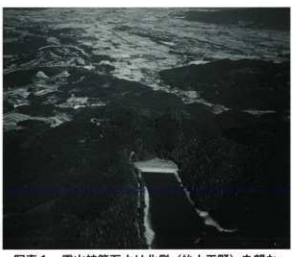


写真１　雷山神籠石より北側（怡土平野）を望む

写真２　雷山神籠石より南側（背振山脈）を望む

### (2). 雷山神籠石の研究史

雷山神籠石の研究は江戸時代の貝原益軒に端を発する。宝永6年（1709）、貝原益軒は「筑前国続風土記」のなかで「雷村の西に怡土の城の址あり」と記し、雷山神籠石を怡土城と考えた。

天保9年（1838）、伊藤常足は「太宰管内志」の怡土城の項において「怡土城の趾は雷村の西にあり」と記し、貝原益軒の説を踏襲し、伊藤常足も雷山神籠石を怡土城と考えた。

江戸時代末になり、青柳種信は「筑前国続風土記拾遺」のなかで「怡土古城」の記述に「雷山の西の方山上（筒原）にあり」と記しており、青柳種信も雷山神籠石を怡土城と考えた。しかし、「筑前国続風土記拾遺」における「高祖古城」の記述には「凡上下城及所々矢倉址鏃撞等の跡に古瓦有。極めて古代の物なり。」とあり、高祖城と怡土城の遺構について誤解はあるものの、怡土城は高祖山に所在すると考える説の萌芽がみられる。

明治時代に入り、神籠石論争が起こり、雷山にある遺跡も神籠石の一つに数えられ、怡土城よりもさらに古い時代のものと認められる。さらに、高祖山から奈良時代の古瓦等が出土し、高祖城が怡土城を再利用して築城されたということが実証された。それ以後、怡土城は高祖山に所在し、雷村の西にある遺構（雷山神籠石）は怡土城ではないとする説が正しいとされるようになった。

その後、小出都降叙[7]、島田寅次郎[8]、原田大六らによって調査・研究が進められた。

雷山神籠石に初めて遺構として記録が作成されたのは大正15年（1926）で、松尾繁人・島田寅次郎による。水門・列石の配置を示した測量図が作成された。この調査の結果をもとに、昭和7年（1932）に水門・列石に沿って前後幅10mが史跡に指定された。

昭和34年（1959）に原田は「神籠石の諸問題」[9]と題する論文を発表している。その中で原田は東アジア史の流れを踏まえた上で、「日本書紀」の敏達天皇12年条の記載や神籠石の分布状況を検証し、国家指導の下で大陸からの防御を目的として築造された山城であること、石材加工技術に終末期の巨石古墳築造技術との類似点がみられることなどから、その築造の時期を6世紀末と推定した。また、列石には土塁や木柵が未確認であったことをとりあげ、城塞としての機能に乏しかったためにその機能を果たすことなく次代の本格的な朝鮮式山城に移行していったとする「神籠石愚城論」を展開した。さらに、神籠石が高地から低地へと推移していったという想定の下で、雷山神籠石が他の諸例に比べ高所に築造されていることや、水門構造の分析等をもとに神籠石の編年案を提示し、雷山神籠石を最古期のものと位置づけた。それはのちの神籠石研究に刺激を与えるとともに、その後の神籠石の調査・研究にも影響を与えている。

さらに、昭和35年（1960）に林道拡張のため、前原町教育委員会（現糸島市教育委員会）が主体となって、南水門に繋がる西側の列石の調査が行われ、原田がその調査の担当者となった。また、その成果の一部は『古代学研究』[10]で報告されている。

その後は、平成8年（1996）11月に前原市（現糸島市）を会場にして「雷山神籠石と怡土城の現状について」というテーマで古代山城研究会（第15回例会）が開催された。その際、有志により雷山神籠石の踏査を実施して、『溝濊』第7号（1998年）において、瓜生がその結果を紹介している[11]。

## Ⅲ. 踏査結果

雷山神籠石は雷山の中腹にあり、開発が進まなかったこともあって、昭和35年の調査以来、手つかずの状態であった。そのため、北水門と東西方向に派生する列石群、南水門と東西方向に派生する列石群等についての情報はあったものの、それ以外の情報については皆無の状態であった。そこで、現地を踏査して現状を再確認する目的で実施したのが平成8年（1996）年11月25日の古代山城研究会による踏査であった。

この踏査の結果、南水門部については雷山の二渓谷からの2筋の水流に対処するために、2箇所の水門（入水口）（西側に暗渠様式、東側に北水門と同様の石塁の中に水樋を構築する様式）が設置されていたと考えた。

その後も、白主的に踏査を続け、南水門部の城内側の列石の一部などを確認することができた。

また、数次に亘る踏査の結果、2箇所の入水口の間にテラス状遺構（写真3）が広がることが判明した。テラス状遺構は2箇所の入水口から1.5

mほど高いテラス状の平地になっており、その断面には幅約40～50cm、厚さ約20cmを測る人頭大の石材が自然堆積ではなく整然と組まれていることも確認できた。

そのテラス状遺構について、発見当初は2箇所の入水口に気をとられあまり注目していなかった。しかし、その後の踏査の結果、石材の組まれている範囲が北水門部の南北幅とほぼ同規格であることが判明した。さらに断面観察の結果、整然と石材が組まれており、そして2箇所の入水口との位置関係を考慮すると、自然の堆積とは考えにくく、2種類の入水口と構造的に何らかの関係があるのではないかと瓜生は考えた。

以上の諸問題を念頭に置きながら、平成22年(2010) 11月20日に北垣聰一郎氏と雷山神籠石の踏査を行った。その結果、南水門部について新たなる発見があった。以前の踏査結果もふまえて、雷山神籠石の南水門部の現時点における遺構の状態についてまとめてみたい。

写真3　テラス状遺構（南より）

**(1). 南水門部のテラス状遺構について**

平成8年（1996）11月25日の南水門部の踏査の際、東側の川筋部分については北水門と同様の石垣を築き、その一部に水樋を設けて渓谷からの水流を処理したと考えた（写真4）。この一帯には当地に構築された石塁の一部と考えられる石材が散乱しており、その表面はしっかりと整形されている。また、接合面から考えると、ここに構築された石塁も北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれたとも考えた（写真5）。

さらに、西側の川筋部分については、暗渠様式の水門を設置し、渓谷からの水流を処理したと想定した（写真6）。

以上が平成8年当時の南水門部の踏査結果であるが、これは当地に構築された遺構の表面的観察であって、内部構造の観察がなされていなかった。その平成8年の踏査結果に内部構造の観察を付け加えることになったのが平成22年11月20日に実施した踏査結果である。

今回の踏査の際、最初に注目したのが、2箇所の水門と想定していた遺構の間に所在するテラス状遺構の層位（南北方向の断面）であった（写真7）。平成8年当時、このテラス状遺構についてはあまり注目していなかった。ところが、その後の踏査の結果、石材の組まれている南北幅が北水門部のそれとほぼ同規格（約9m）であることが判明した。そのことをふまえて今回テラス状遺構の層位を東西両サイドからあらためて観察すると、断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が自然堆積ではなく人為的に組まれていることが判明した（写真8）。過去の周辺における踏査結果と照合して自然の堆積とは考えにくく、また、北水門部にも同様な石材が裏込石として整然と組まれているのが排水口から一部観察できることから、このテラス状遺構は石塁内部の一部であり、南水門部は裏込石として人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたことが想定された。

さらに、昭和35年の林道拡張に伴う南水門部の調査の結果、谷部にはかなりの土砂が堆積していることが推測され、このことを踏まえると、現時点で確認できる南水門部の2箇所の水門遺構は北水門部の上部2つの水門遺構（オーバーフローした水流に対して対応する水樋）と同様なものと考えることができる。南水門部の遺構は土砂でか

写真4　東側水門遺構（北より）

（参考　昭和55年時点の東側水門遺構（北より））

写真5　散乱する石材（東より）

写真6　西側水門遺構の南側端部（南より）

（参考　昭和55年時点の西側水門遺構の北側端部（北より））

なりの部分がかくれていると考えられ、今後その全容が判明するためにもさらなる調査・研究が待たれる。

ただし、分散している石材の量を考慮すると、未完成（計画途中）で終わった可能性が高いと考えられる。

**（2）．南水門部の築城当初の姿について**

平成22年までの南水門部の踏査結果をふまえて整理すると以下のようになる。

①．平成８年当時、別々の遺構と想定していた南水門部の２箇所の水門遺構は１基の東西長約30ｍ、南北長約９ｍと想定される石塁（第２図）の入水口（オーバーフローした水流に対して対応する入水口）であった可能性が高い。北水門部と同様に、南水門部にも２つ以上の入水口が設けられた大規模な石塁が１基構築される予定であったが、未完成で終わった可能性が高い。

②．南水門部の石塁は北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれ、その裏込石は小石の礫ではなく、断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたと考えられる。

以上の踏査結果から、築城当初において南水門部にも北水門部のように２つ以上の入水口が設けられた大規模な石塁が１基構築される予定であったが、未完成で終わっているようである。その石塁は北水門と同様に「重箱積」ではなく「布積」工法で築かれ、その内部には裏込石として断面形が楕円形を呈する人頭大の石材が整然と組まれ、充填されていたと考えられる。

なお、先にも説明したように、雷山神籠石は林道拡張のための一部の調査を除いて本格的な発掘調査は行われていない。この小稿で言及したことはすべて踏査によるものである。したがって、将来発掘調査等によって、それぞれの遺構の解釈が変わってくる可能性も否定できない。

そのため小稿では現在判明していることのみを列挙し、あえて他の神籠石との比較や雷山神籠石の位置付け等を行わなかった。

写真７　テラス状遺構の層位（南北方向）（南より）

写真８　テラス状遺構の層位（近景）（南より）

## Ⅳ．雷山神籠石に関係する交通路について

研究史でも説明した様に、雷山神籠石については昭和35年の林道拡幅に伴う南水門部の一部の調査を除き、ほとんど手つかずの状態にある。そのため、踏査等を実施して遺構の確認に努めているのであるが、情報不足で雷山神籠石の全体像を把握するには難しい状況にある。

ただし、幸運なことに『筑前国続風土記』をはじめとする文献資料のなかに、雷山神籠石は記録されており、その中に雷山神籠石を解明するためのヒントが隠れていると考える。

そこでこの項においては『筑前国続風土記』等の文献史料にも着目し、それから見える交通路に視点を置き、交通的視点からその築城目的など探っていきたい。

### （1）．雷山神籠石の北側を走る弥生時代の幹線道路「日向峠越えルート」

『魏志倭人伝』によると、末盧国、伊都国、奴国、不弥国等の記述が確認できる。唐津市付近（末盧国）、糸島市付近（伊都国）、春日、福岡市付近（奴国）等の遺跡分布をみると、各平野の中心的な遺跡は一本のルートで結ぶことができる。現在、唐津から海岸沿いに深江にいたると、ここを起点とする県道（大野城・二丈線）によって日向峠越えで春日市須玖にいたる。さらに、県道を東に進むと、宇美町を経由してショウケ越えで飯塚市にいたる。宇美は文献の上で、また立岩遺跡の位置する飯塚は考古学的に、それぞれ「不弥国」に比定されることが多い。こうしてみると、末盧国→伊都国→奴国→不弥国は一本のルートで結ばれ、そこに当時の交通路が浮かび上がってくる。

ところで、この末盧国から不弥国にいたる弥生時代の幹線道路に沿って神功皇后伝承（『日本書紀』、『古事記』に限定）に関する遺称地が分布していることを指摘できる（第３図）[12]。そこで、『日本書紀』、『古事記』に限定して神功皇后伝承をみていくと、「深江」→「宇美」というようにその遺称地と児島・高倉両氏の想定する弥生時代の幹線道路[13]と一致してくる。あくまでも神功皇后伝承は史料としての信憑性を問われているため、それ自体は史実とはいえない。ただし『日本書紀』神功皇后39年条によると「魏志にいわく」という記述があることから、『日本書紀』の編者は『魏志倭人伝』を理解した上で、編集したことがうかがわれる。このことから、糸島市二丈深江から日向峠を経由して飯塚市立岩へと続くルートは『魏志倭人伝』すなわち中国の歴史書に記録されている史実であった可能性がたかい。その史実を『日本書紀』の編者が国家的意図の下で「神功皇后伝承」として書き換えられたのではなかろうか。そのため史実として記録にのこらなかったと理解できる[14]。

なお、このルートは古墳時代を経て、奈良時代まで存続している。その証として当該ルートを介して、その周辺部に磐井の乱後、肥君一族が進出しており[15]、さらに、雷山神籠石、怡土城、大野城等が築城されている（第４図）[16]。

なかでも、怡土城に絞ってみていくと、海岸部に新設された奈良時代の「官道」と「日向峠越えルート」との三角州的位置に築城されている。また、怡土城の望楼は両ルートを見渡すことができる位置に設置されており[17]、このことから「日向峠越えルート」は時代を経ても新設の「官道」と同じくらい重要視されていたことがわかる[18]。

### （2）．雷山神籠石と肥前地域への道路との関係

次は、雷山神籠石と肥前地域への道路との関係について考えることにする。最初に『筑前国続風土記』の「雷山」の部分で注目すべき記述があるので紹介することにする。記述は「雷村より肥前国無津呂村に越える道一里許有。其の間に大たうげとて坂あり。」となっている。

また、『筑前国続風土記拾遺』の「雷山村」の部分で、「国境の小字六所あり。扇平　ユウスリ　大谷　大谷辻　エゲ　大峠等なり（大峠より無都呂に通ふ小道あり）」という記述もある。これを地形図（明治33年大日本帝国陸地測量部測量同35年製版）（第５図）におとして復元すると[19]、雷山神籠石を挟んで二つのルートが現れる。

一つ目は『筑前国続風土記』の「雷山」および『筑前国続風土記拾遺』の「雷山村」の部分から復元したルートである。これは雷山神籠石の東側に位置し、高野から千如寺、雷神社を経由して大峠に向かうルートである。北側は「日向峠越えルート」に接続し、南側は国境を越え長野峠と合流し、肥前地域へと抜ける。

二つ目は雷山神籠石の西側に位置する長野峠[20]

である。これも北側は「日向峠越えルート」に接続し、南側は国境を越えて、高野から千如寺、雷神社を経由して大峠に向かうルートと合流し、肥前地域へと抜ける。

この二つのルートは共に北側では「日向峠越えルート」に接続し、南側では国境を越えて合流し、肥前地域へ抜ける。その糸島地域と肥前地域とを結ぶ両ルートと「日向峠越えルート」に囲まれた場所に雷山神籠石は築城されている。この三つのルートと雷山神籠石が築城された位置とは何等かの関係がありそうだ。

### (3). 雷山神籠石の築城目的について

前項でも説明したように、雷山神籠石の北側は怡土平野が広がり、眼下には「日向峠越えルート」が走る。その東西方向には糸島地域と肥前地域を結ぶ二つのルートが走る。そして南側において、この二つのルートは国境を越えて合流し、肥前地方に抜けるが、さらに南に下ると後の「肥前国府」に至り、「帯隈山神籠石」へと繋がる。

以上の諸条件から、雷山神籠石は怡土平野のみならず、糸島地域と肥前地域とを結ぶルートを押さえることのできる要害の地に位置することがわかる。

ところで、8世紀になると「日向峠越えルート」沿いに「怡土城」が築城される。その築城理由として主に①安禄山の乱に備えて築城されたとする説、②新羅征討計画の一環として築城されたとする説とに集約され、今日では②の説が主流になりつつある。なお、怡土城の防衛面が強く肥前方面を意識していること、そして日本古代史において、日本と朝鮮半島との関係悪化に伴い肥前地方には朝鮮半島側に内応する等の反政府的行動がみられる特質も指摘されていることも考慮して、②の説に準拠しながら肥前地方における反政府的行動も軍事的視野に入れて築城されたと考える説もある[21]。

この肥前地方における反政府的行動を軍事的視野に入れて築城されたと考える説に基づいて考えると、「日向峠越えルート」に接続する肥前地方からの二つのルートはその重要性を増してくる。さらに「日向峠越えルート」と糸島地域と肥前地域とを結ぶ二つのルートに囲まれる場所に築城された雷山神籠石は、その三つのルートを押さえることができるのである。このことを踏まえると、雷山神籠石は当初、糸島地域と肥前地域とを結ぶ交通の要衝を押さえるために築城され、その重要性から怡土城の時代にも怡土城を補完する軍事的施設（烽火など）として機能していたと考えてもよいのではなかろうか。

### (4). 雷山神籠石の城門想定地と麓の集落とを繋ぐ道について

地形図（第1、5図）によると、雷山神籠石の土塁想定ラインの一部において地形的に窪んでいる箇所を確認できる。その箇所は土塁線想定ラインの西端部に位置し、そこから現飯原集落へと一つの道がのびている。

前項まで雷山神籠石を中心として東西両側に二つのルートが南北方向に走り、糸島地域と肥前地域とを繋いでいることを紹介したが、この項においては雷山神籠石とその西麓に位置する長野川流域の集落とを結ぶ道について考えてみたい。

前でも説明したように、地形的に窪んだ場所から西麓に向かって東西方向に一つの道がのび、それを辿ると現飯原集落に至る。その窪んだ場所は雷山神籠石の城門と想定され、そこから繋がる現飯原、長野、川付、そして雷山神籠石の東側に位置する雷山地区等の集落一帯は奈良から平安時代にかけて「長野郷」が設置されたと考えられている[22]。また、遺跡の分布状況から、なかでも現飯原、長野、川付地区は「長野郷」の中心部であったと考えることができる[23]。

雷山神籠石をはじめとする神籠石系山城については、いつ頃、誰が、どのような目的で築城されたか定かではない。そのため築城を命じた主体など不明なことも多いが、築城するには人力（労働力）等が必要であった。

まず、その負担を強いられたのは雷山神籠石周辺地域の集落と推測され、糸島地域と肥前地域とを繋ぐ二つのルート周辺の遺跡の分布状況から考えると、雷山神籠石の西麓に位置し、「長野郷」の中心部であった集落（現飯原、長野、川付集落一帯）がその一つであったと考えられる。

そのために、雷山神籠石には西側端部に城門の一つが構築され、築城の際、有事の際にも当該地区の人々がその城門につながるこの道を通って出入りしたのであろう。

ただし、遺構の残存状況から雷山神籠石は未完

成で廃棄されたと考えられており、このことを踏まえると、この城門もどこまで構築されたのか不明である。

## V．おわりに

この小稿は平成22年（2010）11月20日に実施した踏査結果と交通路に関する最新情報を整理したものである。ふと我に返ると、平成8（1996）年の踏査から約14年も年月が経過していた。その間、各地で古代山城の発掘調査が行われ、様々な調査結果（データなど）が蓄積されている。雷山神籠石についても、時間を見つけては踏査を継続し、若干の踏査結果を蓄積していたつもりでいたが、石材の組み方からの視点での踏査は全く行っていなかった。そのために、雷山神籠石の南水門部における2箇所の水門と想定していた2つの水門遺構は1基の石塁の人水口の可能性が高く、また、その内部構造に特徴が認められるという今回の踏査結果は特筆すべきと痛感させられ、整理した次第である。

その石材の組み方からの視点で改めて北水門部を観察すると、興味深いことに上段の排水口を境にして石材の組み方が異なっているのがわかる（写真9、10）。下層は一層ごとに大型の石材を組む工法を採っている。上層は一層ごとに下層より一回り小さい石材を組む工法を採っている。この違いは何を意味するのであろうか。今後、このテーマについても視野を広げて踏査を継続しつつ、雷山神籠石のみならず他の古代山城の調査・研究にも精進していきたいと思う。

最後に、この小稿を整理するにあたって、北垣聰一郎氏（石川県金沢城調査研究所）、田中俊明氏（滋賀県立大学）、向井一雄氏（古代山城研究会）、に多大なるご指導、ご助言及び貴重な関連資料を賜った。末尾ながら記してここに感謝の意を表し、この小稿のおわりとしたい。

写真9　雷山神籠石北水門（城外側）（北より）

写真10　雷山神籠石北水門（城内側）（南より）

註

1．今日までの調査・研究成果をふまえ「神籠石」の名称については、例えば「雷山神籠石」を「雷山城」というように表記をかえる傾向にあるが、この小稿においては指定名称に基づき「神籠石」の名称を使用することにする。

2．『おつぼ山神籠石』佐賀県武雄市史跡報告（佐賀県武雄市・1965年）

3．古代山城研究の動向と課題については向井一雄氏が「古代山城研究の動向と研究」（『溝濃』第9号・第10号合併号・古代山城研究会・2001年）で詳細に整理している。

4．渡辺正氣「神籠石の築造年代」（『考古学叢考』中巻・斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編・吉川弘文館・1988年）

5．長洋一「朝倉橘廣庭宮をめぐる諸問題」（『神戸女学院大学論集』第26巻・第3号・1980年）

6．白石成二「永納山城と熟田津―伊予国からみた古代山城論―」（ソーシャル・リサーチ研究会・2007年）
　狩野久「瀬戸内古代山城の時代―築造から廃止まで―」（『坪井清足先生卒寿記念論文集―埋文行政と研究のはざまで―』（坪井清足先生の卒寿をお祝いする会・2010年）

7．小田部降叙『筑紫国神籠石』・1897年

8．島田寅次郎「雷山神籠石（筒城）」（『福岡県史跡天然記念物調査報告』・第2集・1926年）

9．原田大六「神籠石の諸問題」（『考古学研究』・第6巻第3号・1959年）

10．原田大六「雷山神籠石の列石考」（『古代学研究』・第28号・1961年）

11．瓜生秀文「雷山神籠石―現在までの調査から―」（『溝濃』・第7号・古代山城研究会・1998年）

12．長洋一氏のご教示による。

13．児島隆人『立岩』（学生社・1969年）
　高倉洋彰「九州本土とその周辺の弥生文化」（『日本歴史地図』原始・古代編（上）の解説・柏書房・1982年）

14．瓜生秀文「神功皇后伝承覚書―神功皇后伝承で覆い隠された二つの史実―」（『筑紫野市史』資料編（上）考古資料・2001年）

15．瓜生秀文「古代の御笠―筑前国御笠郡一帯への移住について―」（『筑紫野市史』資料編（上）考古資料・2001年）

16．赤司善彦「北部九州の古代山城」（『シンポジウム記録4　激動の七世紀と古代山城・吉備の鉄』・考古学研究会・2004年）

17．『国指定史跡　怡土城跡』（前原市文化財調査報告書第94集・前原市教育委員会・2006年）

18．糸島市より日向峠を越えた福岡市早良区金武には「金武青木遺跡」があり、「怡土城」に関連する木簡が出土している。「日向峠越えルート」と「怡土城」との関係の一端を示す貴重な史料である。
　『金武青木―金武青木A遺跡第一次調査・金武青木B遺跡第一・二次調査―』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1164集・2012年）に収録。

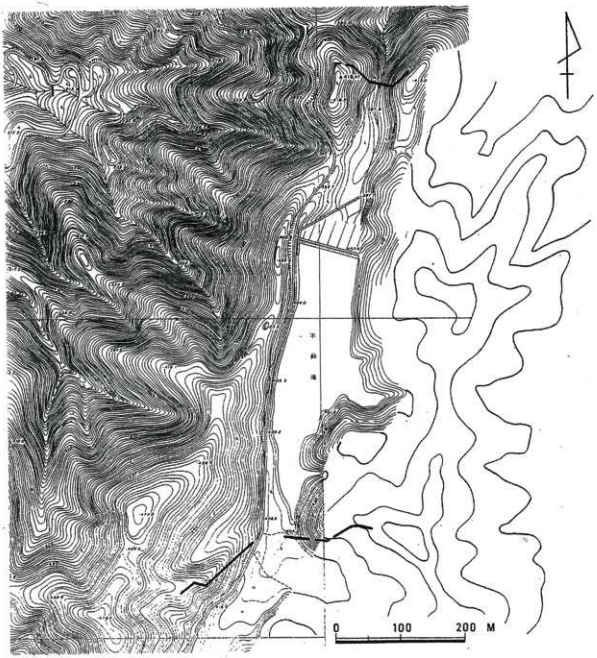
19．雷山神籠石は昭和7年に水門・列石の前後10mのみ国指定史跡として指定されている。そのため、雷山神籠石の城域内ではあるものの、指定地外であるその中心部に昭和9年の大潮水をうけて、「不動池」が造られる。その不動池の工事が入る前の地形を示す貴重な資料が明治33年大日本帝国陸地測量部の作成した地形図であり、当時の様子をよく伝えている。

20．向井一雄氏は「西日本の古代山城遺跡（類型化と編年についての試論）」（『古代学研究』125号・古代学研究会・1991年）のなかで雷山神籠石が「長野峠越えルート」を押さえる位置にあることを指摘している。

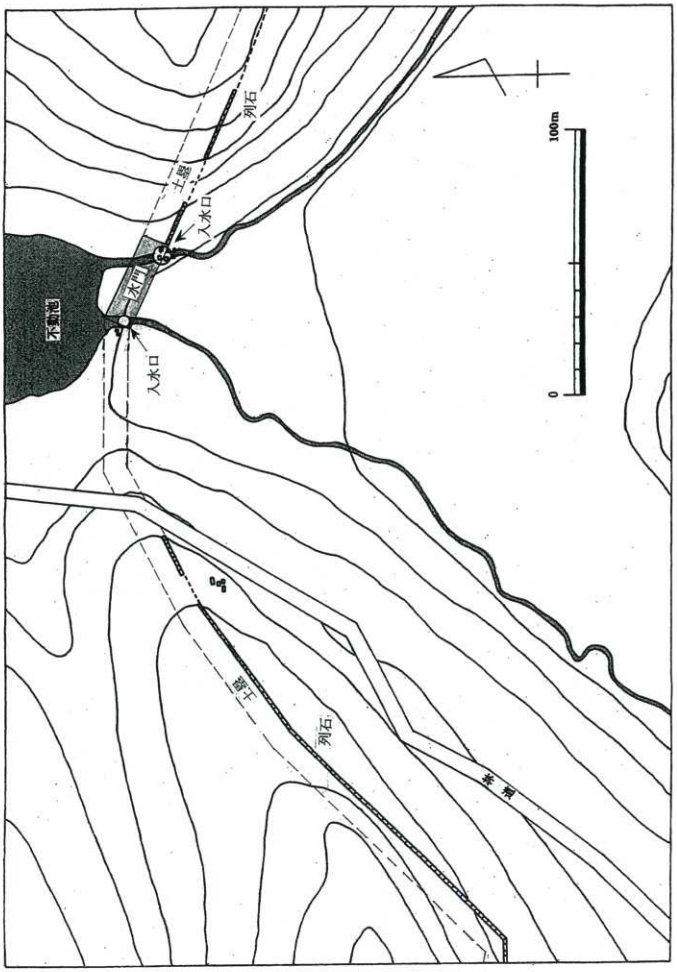
21．長洋一「天平宝字五年の肥前国」（『西南学院大学国際文化論集』1-6・1986年）
　瓜生秀文「怡土城について―怡土城築城における人間模様―」（高倉洋彰編『東アジア古代文化論攷』・中国書店・2014年）
　瓜生秀文「怡土城と吉備真備・佐伯今毛人」（『西日本文化』471号・西日本文化協会・2014年）

22．『糸島郡誌』（糸島郡教育会編・1927年）によると、『日本地理誌』を引用して「小蔵、一貴山、川付、飯原、長野、雷山」の諸邑を「長野郷」の郷域としている。

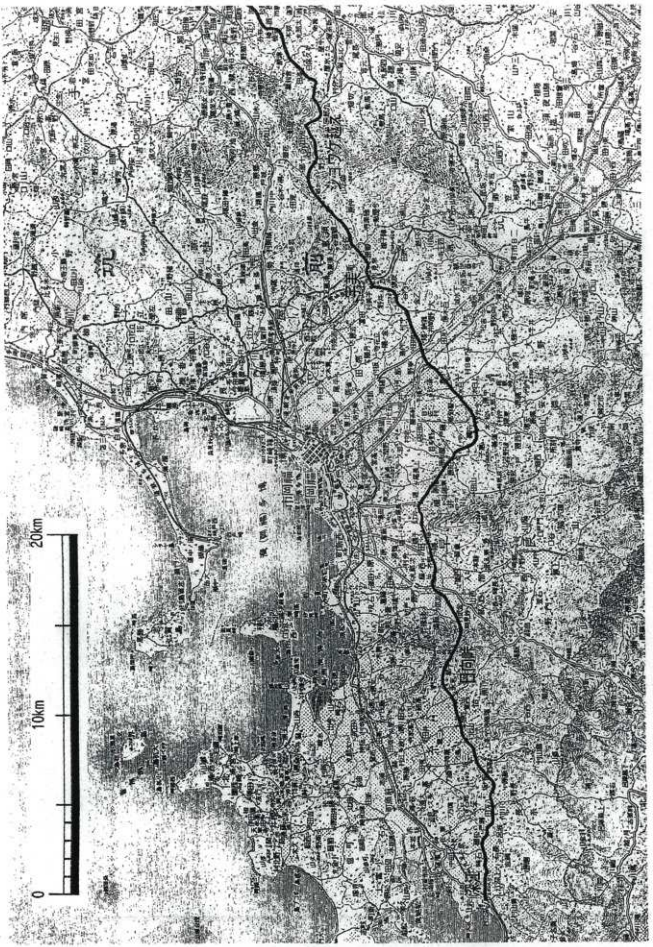
23．遺跡の分布状況等については岡部裕俊氏のご教示による。



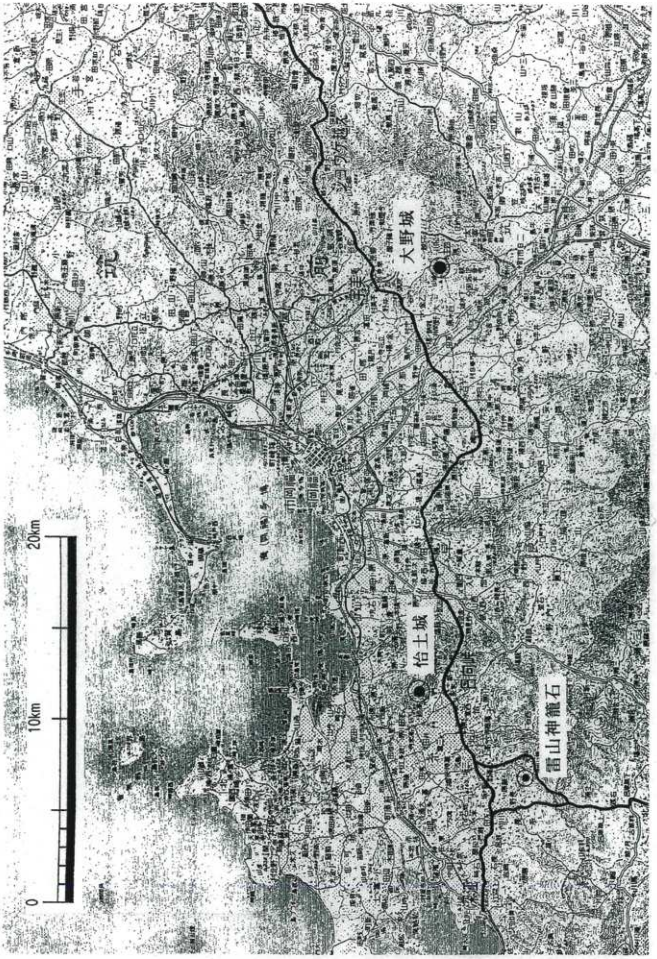

第１図　雷山神籠石遺構平面図



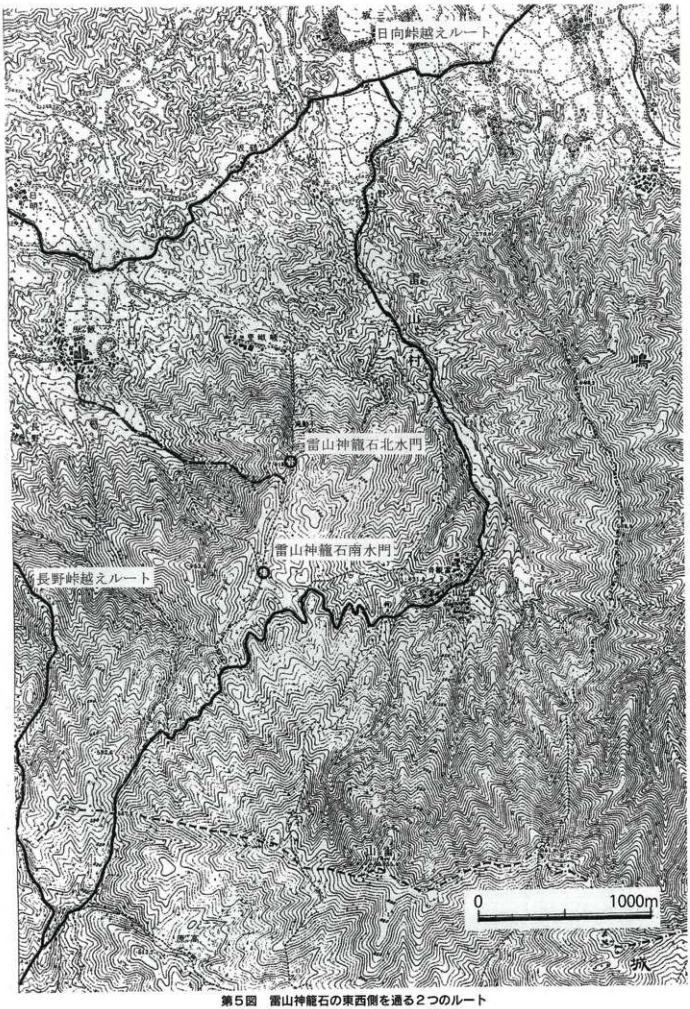

第２図　雷山神龍石南水門周辺遺構配置図




第３図　神功皇后伝承遺称地（『日本書紀』『古事記』に限定）に関する地名・遺跡




第４図　神功皇后伝承遺称地（『日本書紀』『古事記』に限定）に関する地名・遺跡




第５図　雷山神籠石の東西側を通る２つのルート

糸島市立 伊都国歴史博物館紀要

第11号

発行日　平成28年3月31日
発　行　糸島市立伊都国歴史博物館
〒819-1582
福岡県糸島市井原916
印　刷　株式会社重富印刷
〒819-1119
福岡県糸島市前原東3丁目1番8号
TEL (092) 322－0191